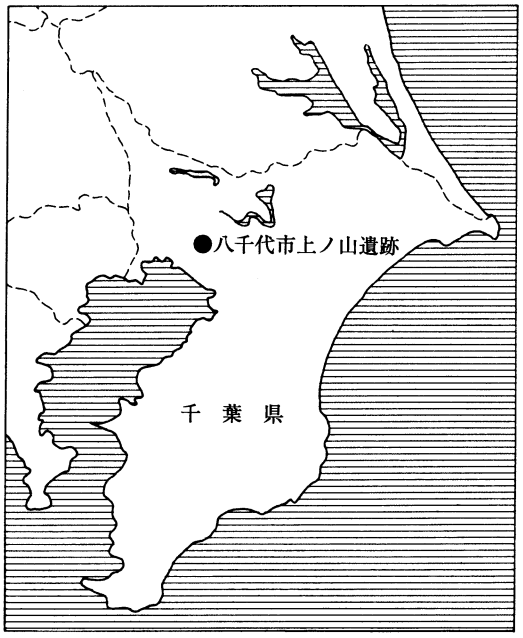
千葉県八千代市

上ノ山遺跡b・c地点発掘調査報告書



2000

八千代市上ノ山遺跡調査会
八千代市遺跡調査会

序　文

上ノ山遺跡は千葉県北西部の八千代市に所在しています。八千代市は印旛沼・新川・桑納川などの豊かな水を背景として、旧石器時代以来たくさんの人々が生活を営んできました。この恵まれた自然環境のもとで、八千代市は江戸時代になると成田街道の宿場町として栄えます。一方、戦後は首都30km圏に位置する近郊住宅都市として、全国でもまれにみる人口増加で急成長を遂げました。また近年では、市北部域に大学と住宅地がセットで開発され、文教都市としての側面も併せ持つようになりました。このように急速に発展した反面、市中央を南北に流れる新川沿いには豊かな自然も残されています。これからも八千代市は水と緑豊かな環境を守りながら、着実に発展していくことと思われます。

今回報告いたします上ノ山遺跡は、成田街道（国道296号線）の北側の萱田町に所在しています。萱田町周辺は、京成電鉄の大和田駅、平成８年に開通した東葉高速鉄道の八千代中央駅・村上駅に比較的近いこともあり、近年宅地造成などの開発が盛んな地域です。今回の発掘調査の原因となる宅地造成も駅に近いというこの利便性によるものが大きいようです。今回この宅地造成の予定地内に所在する埋蔵文化財について、関係諸機関による慎重な協議を重ねた結果、やむなく発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることとなった次第であります。

八千代市内では、これまで多くの遺跡が発掘調査されています。今回の発掘調査でも特に弥生時代の集落跡を主体とする貴重な成果を得ることができました。本報告書が学術資料としてはもとより、教育資料として、そして地域の歴史に関心を持たれている多くの方々に大いに活用されることを、また、埋蔵文化財についてより多くの方々の理解を深め、文化財保護について関心を高めることに寄与できるよう願ってやみません。

最後になりましたが発掘調査から報告書刊行に至るまでの間、御協力頂きました中台道子氏、中台昭氏をはじめとして、御指導・御助言を頂いた千葉県教育委員会、八千代市教育委員会、および関係諸氏・関係諸機関の皆様方に深く感謝いたします。また、発掘調査・報告書作成作業に従事された調査員、補助調査員、調査補助員、整理補助員の方々にも厚く御礼申し上げます。

平成12年３月31日

八千代市上ノ山遺跡調査会
八千代市遺跡調査会
会　長　　藤　城　恒　昭

例　言

1．本書は、八千代市萱田町字上ノ山に所在する上ノ山遺跡ｂ地点及びｃ地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．上ノ山遺跡は、昭和61年度、平成５年度、平成８年度の３次にわたり発掘調査が実施されている。本書では、昭和61年度調査区をａ地点、平成５年度調査区をｂ地点、平成８年度調査区をｃ地点とした。

3．上ノ山遺跡ｂ地点の発掘調査は、中台道子・中台昭氏の委託により、八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市上ノ山遺跡調査会が実施した。上ノ山遺跡ｃ地点の発掘調査は中台道子氏の委託により、八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。各調査会の組織は次頁の通りである。

4．上ノ山遺跡ｂ地点及びｃ地点の所在地、調査期間、調査面積、調査原因、調査機関・担当は下記の通りである。

地点名	所在地	調査期間	面積	調査原因	調査機関・担当
上ノ山遺跡ｂ地点	八千代市萱田町字上ノ山883-1、894-2の一部	平成６年２月１日 ～ 平成６年３月11日	1,200㎡	共同住宅建設	八千代市上ノ山遺跡調査会 武藤健一
上ノ山遺跡ｃ地点	八千代市萱田町字上ノ山883-2	平成９年１月10日 ～ 平成９年１月22日	216㎡	共同住宅建設	八千代市遺跡調査会 森　竜哉

5．整理作業及び報告書作成作業は武藤健一が担当し、平成11年７月12日～同年８月13日、平成11年11月15日～同年12月10日の期間実施した。

6．本書は第１章を武藤健一、第２章を武藤健一・深谷昇、第３章を深谷昇が執筆し、武藤健一が編集を行った。

7．発掘調査に伴う出土遺物及び図面・写真等の記録類は、八千代市教育委員会が保管している。

8．発掘調査から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関並びに多くの方々の御指導・御協力を頂いた。記して深く謝意を表します。（敬称略）

千葉県教育委員会、八千代市教育委員会、八千代市川崎山遺跡調査会、千代田測量企画株式会社、千葉測量企画株式会社、株式会社スターツ、朝比奈竹男、茅野　強、蕨　茂美

調　査　会　組　織

八千代市上ノ山遺跡調査会組織（平成５年度）

会　　長	伊藤　勇毅	八千代市教育委員会生涯学習部長
事務局長	今井　利久	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長
事務局長補佐	鈴木　賢治	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長補佐
事務局係長	酒井　久男	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係長
事務局員	平山りえ子	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係主事
	森　　竜哉	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係主事
調査員	武藤　健一	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係主事補
調査補助員	磯江 公子　岩井 アヤ　岩瀬 道子　遠藤 啓子　笠川 千代子　木村 しづ子　小島 保江 小林 美津子　斉藤 節子　佐藤 忠信　田村 美恵子　東原 和男　中尾 恭子　野中 則子 早坂 英子　早坂 幸子　原田 雪子　前嶋 京子　宮腰 和子	

八千代市遺跡調査会組織（平成８年度）

会　　長	村越　利光	八千代市教育委員会生涯学習部長
委　　員	今井　利久	八千代市教育委員会生涯学習部参事兼社会教育課長
	中台　道子	事業者・土地所有者
監　　査	中台　道子	事業者・土地所有者
事務局長	今井　利久	八千代市教育委員会生涯学習部参事兼社会教育課長
事務局係長	小名木伸雄	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係長
事務局長	秋山　利光	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係主事
	常松　成人	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係主事
調査員	森　　竜哉	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化係主事
調査補助員	遠藤 玲子　落亀 昌子　笠川 千代子　斉藤 節子　酒巻 紀子　田久保 松枝　寺澤 洋子 鳥羽 良子　野中 則子　原田 雪子　室井 恭子　矢尾 ヤス子　渡辺 信子	
整理補助員	落亀 昌子	
事務員	鈴木 安子　高崎 房江　山田 昌代	

八千代市上ノ山遺跡調査会・八千代市遺跡調査会組織（平成11年度）

会　　長	藤城　恒昭	八千代市教育委員会生涯学習部長
副会長	三浦　幸子	八千代市教育委員会生涯学習部次長
委　　員	實川　憲	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長（９月30日まで） 八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課長（10月１日から）
	中台　道子	事業者・土地所有者
監　　査	中台　道子	事業者・土地所有者
事務局長	實川　憲	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長（９月30日まで） 八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課長（10月１日から）
事務局係長	小名木伸雄	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係長（９月30日まで） 八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護班主査（10月１日から）
事務局長	秋山　利光	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係副主査（９月30日まで） 八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護班副主査（10月１日から）
	宮澤　久史	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主任主事（９月30日まで） 八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護班主任主事（10月１日から）
調査員	武藤　健一	八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主事（９月30日から） 八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護班主事（10月１日から）
補助調査員	深谷　昇	明治大学大学院史学専攻博士前期課程修了（平成11年3月）
事務員	鈴木 安子　高橋 昌代	

凡　例

1．遺構番号は本調査の時点では、遺跡の各地点ごとに遺構の種類別に番号を付した。遺物への注記、図面・写真への記録はこれによる。しかし、本書では調査された地点順に、つまりａ地点から遺構別に通しの遺構番号を新たに付け直した。グリッド番号の表示については、基本的にｂ地点の本調査時の表示方法を採用し、本書ではこれを一部改変して使用している。

2．本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれの図も一部改変・合成して使用している。

第１図　国土地理院発行　１／25,000地形図「習志野」「佐倉」（平成10年発行）

第２図　参謀本部陸軍部測量局発行　第一軍管区地方１／20,000迅速測図（明治15年発行）

第３図　八千代市発行　１／2,500八千代市都市計画基本図No.18・24（昭和54年発行）

第４図　八千代市発行　１／2,500八千代市都市計画基本図No.18・24（昭和54年発行）

3．「第20図　八千代市新川流域の弥生時代遺跡分布図」は、国土地理院発行１／50,000地形図「佐倉」（昭和48年発行）と参謀本部陸軍部測量局発行第一軍管区地方１／20,000迅速測図（明治15年発行）をもとに作成した。

4．本書の挿図において方位の表示のないものは、公共座標に基づく座標北を上としている。

5．本書の遺構実測図における用例は以下の通りである。

(1)図中及び本文中における方位は、公共座標に基づく座標北を示している。

(2)遺構実測図中に記載している標高は、東京湾の平均海水面を基準としている。

(3)縮尺率については遺構実測図中に表示したスケールを参照されたい。

(4)住居跡平面図中に使用した一点鎖線は、床面の硬化範囲を示している。

(5)住居跡平面図中で使用した破線は、推定復元線を示している。

(6)遺構実測図中のスクリーントーンの表示は以下の通りである。

炉・炉内焼土範囲　　床被熱範囲

6．本書の遺物実測図における用例は以下の通りである。

(1)縮尺率については遺物実測図中に表示したスケールを参照されたい。

(2)遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下の通りである。

須恵器　　釉

(3)写真図版中における遺物番号は、本文中における遺物番号と一致している。

(4)写真図版中の遺物写真は、任意の縮尺で掲載している。

7．本書の写真図版において使用した航空写真は以下の通りである。

図版１(1)　国土地理院　昭和22年撮影

図版２(1)　八千代市　平成11年撮影

目　次

序　文
例　言
　調査会組織
凡　例
目　次
　挿図目次
　表目次
　写真図版目次

第１章　序　説 …… 1
　第１節　遺跡の立地と環境 …… 1
　第２節　調査に至る経緯・経過及び調査の方法 …… 7

第２章　遺構と遺物 …… 11
　第１節　遺跡の概要 …… 11
　第２節　旧石器時代 …… 11
　第３節　弥生時代 …… 12
　第４節　近世以降 …… 18
　第５節　遺構外出土遺物 …… 20

第３章　まとめ …… 26

報告書抄録 …… 30

挿　図　目　次

第１図　上ノ山遺跡及び周辺遺跡位置図 …… 2
第２図　上ノ山遺跡位置図 …… 3
第３図　上ノ山遺跡周辺地形図 …… 4
第４図　上ノ山遺跡調査範囲図 …… 8
第５図　上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点遺構配置図 …… 9
第６図　旧石器時代調査トレンチ配置図 …… 11
第７図　Ｇ－3－1トレンチ土層断面図 …… 11
第８図　Ｇ－2－1トレンチ遺物出土状況図 …… 11
第９図　３号住居跡実測図 …… 13
第10図　３号住居跡出土遺物 …… 14
第11図　４号住居跡実測図 …… 16
第12図　４号住居跡出土遺物 …… 16
第13図　５号住居跡実測図 …… 17
第14図　５号住居跡出土遺物 …… 18
第15図　１号溝及び２号溝実測図 …… 19
第16図　１号溝出土遺物 …… 20
第17図　２号溝出土遺物 …… 20
第18図　遺構外出土遺物(1) …… 21
第19図　遺構外出土遺物(2) …… 23
第20図　八千代市新川流域の弥生時代遺跡分布図 …… 27

表　目　次

第１表　３号住居跡出土遺物観察表 …… 15
第２表　４号住居跡出土遺物観察表 …… 15
第３表　５号住居跡出土遺物観察表 …… 18
第４表　１号溝出土遺物観察表 …… 18
第５表　２号溝出土遺物観察表 …… 20
第６表　遺構外出土遺物観察表 …… 24

写　真　図　版　目　次

図版１(1)上ノ山遺跡周辺航空写真（昭和22年）
図版２(1)上ノ山遺跡周辺航空写真（平成11年）
(2)ｂ・ｃ地点調査前全景（東より）
(3)ｃ地点調査区全景（北西より）
(4)ｂ地点調査区東全景（北より）
(5)ｂ地点調査区西全景（北より）
図版３(1)Ｇ－３－１トレンチ土層断面
(2)Ｇ－２－１トレンチ遺物出土状況
(3)３号住居跡遺物出土状況（確認調査）
(4)３号住居跡遺物出土状況（確認調査）
(5)３号住居跡遺物出土状況
(6)３号住居跡完掘状況
(7)３号住居跡Ａ炉完掘状況
(8)３号住居跡Ｂ炉完掘状況
図版４(1)４号住居跡完掘状況
(2)４号住居跡炉完掘状況
(3)５号住居跡完掘状況
(4)５号住居跡炉完掘状況
(5)１号溝完掘状況
(6)２号溝完掘状況
(7)調査風景
(8)調査風景
図版５(1)３号住居跡出土遺物
図版６(1)３号住居跡出土遺物
(2)４号住居跡出土遺物
(3)５号住居跡出土遺物
(4)１号溝出土遺物
図版７(1)２号溝出土遺物
(2)遺構外出土遺物
図版８(1)遺構外出土遺物

第１章　序　　説

第１節　遺跡の立地と環境

上ノ山遺跡（１）は、八千代市萱田町字上ノ山に所在する。上ノ山遺跡の所在する八千代市は、千葉県北部に広がる下総台地の西部に位置している。下総台地は標高20～40m前後の起伏が非常に少ない洪積台地で、長期間の浸食作用によってできた樹枝状の谷津によって開析されている。八千代市は印旛沼の西岸に位置し、市中央部を南から北に縦断して印旛沼に流れる新川とその支流で市北西部を東西に流れる桑納川とによって大きく３つの台地に区分されている。これらの台地も複雑に入り込む樹枝状の谷津によって開析されている。また印旛沼は現在大きく後退してしまっているが、明治頃までは新川に沿って市北部まで拡がっており、最も拡がった縄文海進時には市中部の萱田・村上地区まで入り込んでいた。しかし、近代以降の干拓や戦後の印旛沼疎水路河幅開削工事等により、印旛沼は現在の位置に大きく後退し、新川の流れも昭和40年代に上ノ山遺跡の東に位置する大和田排水機場で花見川と繋がり北から南の逆方向に変わってしまった。現在新川は印旛沼ではなく東京湾に注ぐ川となっている。

新川沿いの台地は樹枝状の谷津によって開析されており、その谷津に面して数多くの遺跡が形成されている。上ノ山遺跡もそのような遺跡の一つである。上ノ山遺跡は新川西岸の小規模な谷津により開析された舌状台地上に立地しており、標高は20～24mを測る。新川を臨む舌状台地の先端には古墳も２基所在している。

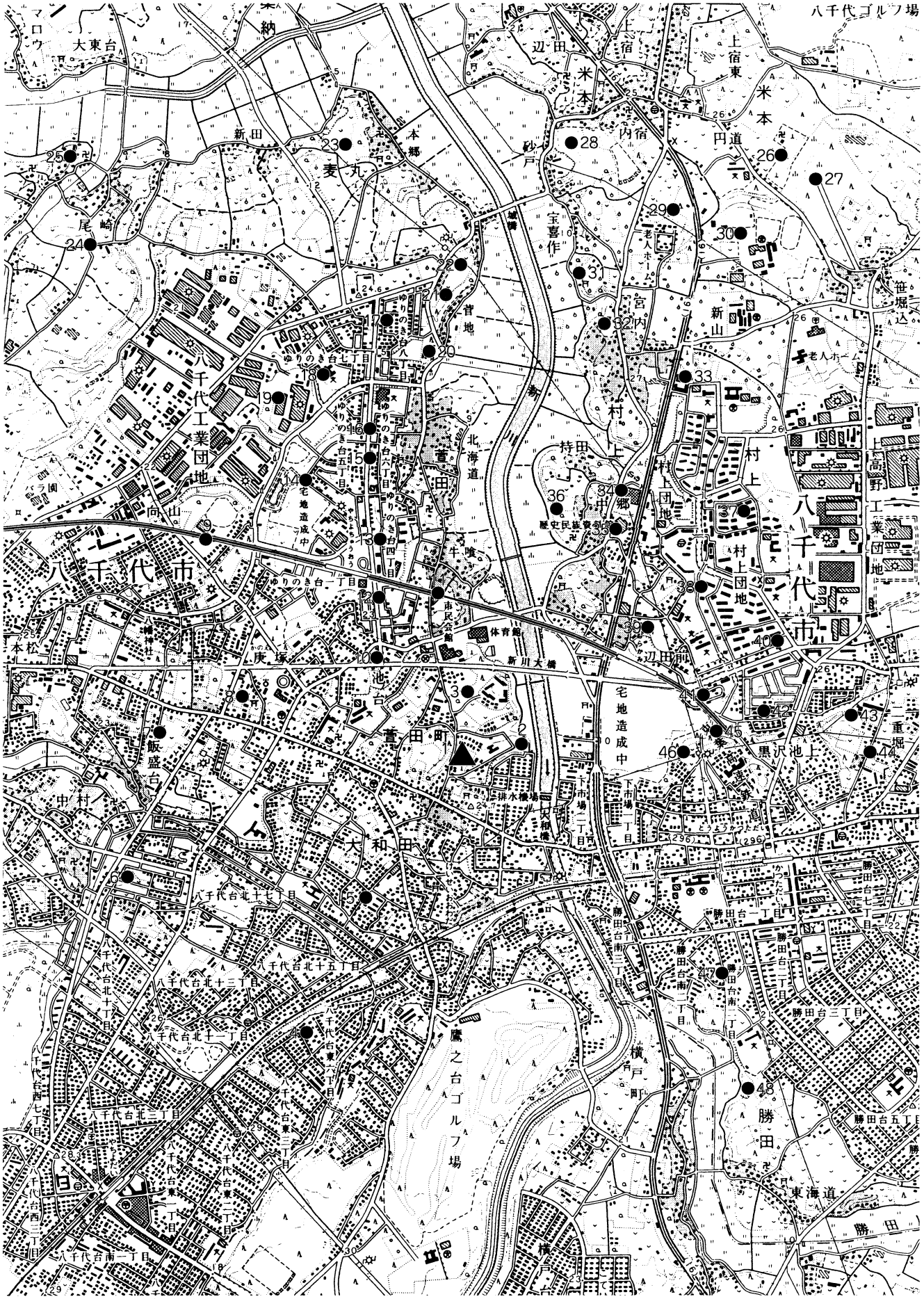
上ノ山遺跡の所在する八千代市中南部の新川流域には多くの遺跡が分布している。特に近隣では、上ノ山遺跡の谷津を挟んだ北側に位置する川崎山遺跡やその更に北側に広がる萱田遺跡群（白幡前遺跡・井戸向遺跡・坊山遺跡・北海道遺跡・権現後遺跡・ヲサル山遺跡）などが著名である。これらの遺跡においては旧石器時代から中世までの遺構が多数検出され多大な成果をあげている。以下では上ノ山遺跡周辺の遺跡や歴史的環境について時代別に概観していきたい。

旧石器時代の遺跡としては、萱田遺跡群の白幡前遺跡（12）・井戸向遺跡（13）・坊山遺跡（14）・北海道遺跡（16）・権現後遺跡（17）・ヲサル山遺跡（18）などがある。特に坊山遺跡では６段階にわたる文化層が検出されている。その他に旧石器時代の遺跡の調査例としては、川崎山遺跡（３）・向山遺跡（９）・沖塚遺跡（45）などがあるが、新川流域における旧石器時代の遺跡の調査例は萱田遺跡群に集中しているといえる。

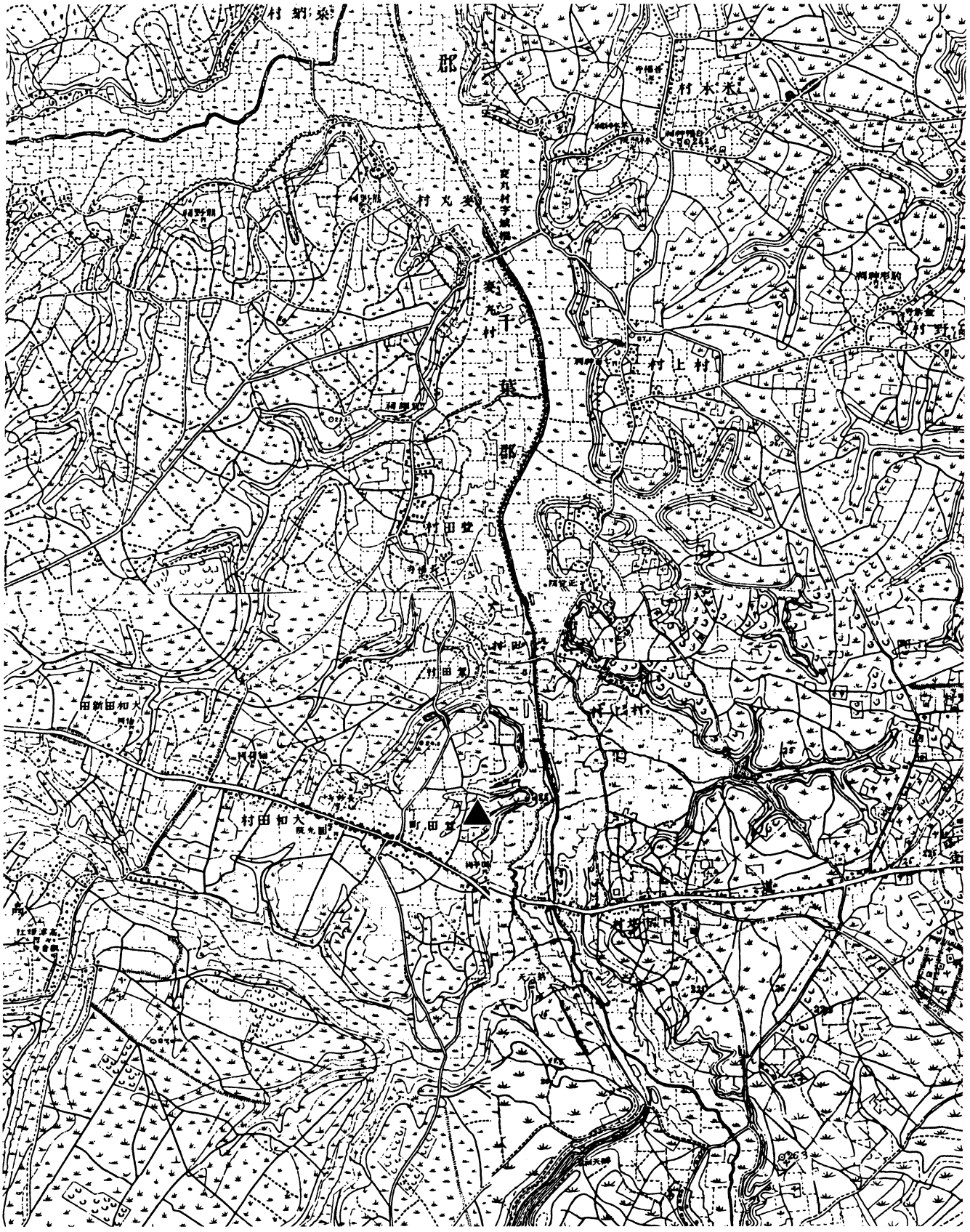
縄文時代の遺跡としては、早期の炉穴群が検出されたヲサル山遺跡、前期の土坑群が検出された二重堀遺跡（43）、中期集落跡のヲサル山南遺跡（19）・新林遺跡（44）、陥穴群が検出された大溜入遺跡（４）・川崎山遺跡・新林遺跡などがある。新川流域における縄文時代の遺跡の調査例は少ない。

弥生時代の遺跡としては、萱田遺跡群の白幡前遺跡・井戸向遺跡・北海道遺跡・権現後遺跡・ヲサル山遺跡や川崎山遺跡・菅地ノ台遺跡（21）・阿蘇中学校東側遺跡（26）・平沢遺跡（27）・込ノ内遺跡（37）などがある。いずれも後期の集落跡を主体とした遺跡である。権現後遺跡は、萱田遺跡群の中でも弥生時代の中心となる遺跡で住居跡73軒、方形周溝墓３基が検出されている。上ノ山遺跡の谷津を挟んだ対岸に位置する川崎山遺跡では10地点にわたる調査で計41軒の住居跡が検出されている。阿蘇中学校東側遺跡と平沢遺跡は谷津を挟んで立地しており、それぞれ25軒と10軒の住居跡が検出されている。なお、現在中期の遺跡は八千代市北部の旧印旛沼沿岸の台地上にのみ確認されており、八千代市中・南部での検出例はほとんどない（註１）。

古墳時代では、箱式石棺内より直刀が出土した堰場台古墳（５）、100本以上の鉄族をはじめ直刀・勾玉などが出土した村上１号墳（37）、貝化石岩の横穴式石室を有する沖塚古墳（46）などの他、菅地ノ台



第１図　上ノ山遺跡及び周辺遺跡位置図（１：25,000）



第２図　上ノ山遺跡位置図（１：25,000）

１．上ノ山遺跡　２．上ノ山古墳群　３．川崎山遺跡　４．大溜入遺跡　５．堰場台古墳　６．高津新山遺跡　７．庚塚第２塚群　８．庚塚第１塚群　９．向山遺跡　10．池ノ台遺跡　11．上の台遺跡　12．白幡前遺跡　13．井戸向遺跡　14．坊山遺跡　15．萱田上人塚（梵天塚）　16．北海道遺跡　17．権現後遺跡　18．ヲサル山遺跡　19．ヲサル山南遺跡　20．飯綱神社　21．菅地ノ台遺跡　22．菅地ノ台古墳　23．大日前塚群　24．尾崎館跡　25．吉橋城跡　26．阿蘇中学校東側遺跡　27．平沢遺跡　28．米本城跡　29．米本塚群　30．村上新山塚群　31．宝喜作台入定塚　32．七百余所神社古墳　33．西山遺跡　34．境作遺跡　35．殿内遺跡　36．持田遺跡・正覚院館跡　37．込ノ内遺跡・村上１号墳　38．名主山遺跡　39．根上神社古墳　40．村上第１塚群　41．村上供養塚・村上第２塚群　42．黒沢台古墳　43．二重堀遺跡　44．新林遺跡　45．沖塚遺跡　46．沖塚古墳　47．勝田台群集塚　48．勝田大作遺跡

第3図　上ノ山遺跡周辺地形図（1：5,000）

古墳（22）・黒沢台古墳（42）などがある。また調査例はないが八千代市指定史跡となっている七百余所神社古墳（32）・根上神社古墳（39）が新川東岸にあり、上ノ山遺跡と同じ舌状台地の新川を臨む先端には上ノ山古墳群（２）が所在している。集落跡としては、前期では、ヲサル山遺跡・井戸向遺跡・権現後遺跡・川崎山遺跡・菅地ノ台遺跡などがある。ヲサル山遺跡では住居跡22軒の他、方形周溝墓が３基検出されており、そのうちの１基から鉄釧も出土している。また、井戸向遺跡においても住居跡31軒の他に方形周溝墓が３基検出されている。中期では、権現後遺跡・北海道遺跡・川崎山遺跡・菅地ノ台遺跡などがある。住居跡以外に石製模造品の工房跡が権現後遺跡では４軒、北海道遺跡では12軒、川崎山遺跡では２軒検出されており、菅地ノ台遺跡でも石製模造品が表採されている。後期では白幡前遺跡・井戸向遺跡・北海道遺跡・権現後遺跡・持田遺跡（36）などで集落が営まれている。

奈良・平安時代の遺跡としては、新川を挟んで両岸の台地上に所在する村上遺跡群（込ノ内遺跡・名主山遺跡）と萱田遺跡群がよく知られている。両遺跡群は、『和名類聚抄』にある「下総国印幡郡村神郷」に推定される遺跡で、1,000軒以上もの住居跡や掘立柱建物跡などの遺構が検出されている。また墨書土器も多数出土しており、「村神郷」という文字が書かれた墨書土器が出土した権現後遺跡や人面墨書土器が出土した白幡前遺跡、「承和五年二月十」（838年）の紀年銘墨書土器が出土した北海道遺跡などが注目される。その他、井戸向遺跡では小仏像や三彩陶器、白幡前遺跡では瓦塔が出土し、村落内寺院と考えられる遺構も検出されていることから、庶民への仏教の浸透が窺える。これら村上遺跡群や萱田遺跡群以外にも周辺では、川崎山遺跡・菅地ノ台遺跡・高津新山遺跡（６）・池ノ台遺跡（10）・上の台遺跡（11）・西山遺跡（33）・境作遺跡（34）・殿内遺跡（35）・勝田大作遺跡（48）などが調査されている。

中世の遺跡としては、堀底より板碑や花瓶が出土した正覚院館跡（36）をはじめ、尾崎館跡（24）・吉橋城跡（25）・米本城跡（28）などの城館跡がある。いずれも新川や桑納川沿いの台地上に所在している。また、城館跡以外では、井戸向遺跡で地下式坑と土坑墓を中心とする遺構群が検出されており、660枚の渡来銭が納められた土坑も確認されている。

近世になるとこの周辺では民衆の信仰の対象として塚が多数造られるようになる。調査されたものでは村上供養塚（41）・村上第１・２塚群（40･41）などがある。村上供養塚では古銭が多数納められた２個の壺が、村上第２塚群からは多数の古銭と小皿がまとまって盛土の下から出土している。また周辺には庚塚第１・２塚群（７・８）・萱田梵天塚（15）・大日前塚群（23）・米本塚群（29）・村上新山塚群（30）・勝田台群集塚（47）などの塚がある他、新川東岸の斜面には入定窟〔宝喜作台入定塚（31）〕も造られている。

上ノ山遺跡の南約200mには、国道296号線が東西に走っている。江戸時代、国道296号線は「佐倉道」と呼ばれていたが、中期以降成田山信仰が盛んになると俗に「成田道」と呼ばれるようになる。大和田から萱田町にかけての街道筋は成田山参詣のための宿場町（大和田宿）として発達し、多くの参詣客で賑わっていた。また上ノ山遺跡の北約1.9kmには飯綱神社（20）が鎮座している。飯綱神社は明治の初め頃まで「飯綱大権現」と呼ばれ、年14回開かれる市（萱田市）には近郷近在から多くの人が訪れていた。飯綱神社に至る道は「権現道」或いは「かやた道」などと呼ばれ、市が開かれる日は多くの人々が列をなしていたという。上ノ山遺跡の西側を南北に走る道も成田道から飯綱神社に至る権現道の一つであったようである。

このように上ノ山遺跡周辺は旧石器時代から近世にかけての遺跡が多数所在し、近世以降も成田道の大和田宿や飯綱神社の萱田市など人々の往来が絶えなかった地域であるといえる。

（註１）市南部の45.沖塚遺跡（平成５年度八千代市遺跡調査会調査）にて中期前葉の土器の検出例があるが、遺構は伴っていない。
深谷昇　2000　「八千代市最古の弥生土器」『埋やちよ』№.7　八千代市教育委員会

第１図掲載遺跡参考文献

１．本書
２．八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
３．ａ地点　八千代市遺跡調査会　1979　『萱田町川崎山遺跡発掘調査報告』
ｂ地点　八千代市教育委員会　1992　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成３年度』
ｃ地点　八千代市教育委員会　1996　『八千代市埋蔵文化財調査年報　－平成６年度版－』
ｄ地点　八千代市教育委員会　1998　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成９年度』
ｅ地点　八千代市教育委員会　1998　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成９年度』
ｆ地点　八千代市教育委員会　1999　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』
ｇ地点　八千代市教育委員会　1999　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成11年度』
ｈ地点　平成11年度に八千代市教育委員会が確認調査を、八千代市遺跡調査会が本調査を実施。平成12年度報告書刊行予定。
ｉ地点　平成11年度に八千代市教育委員会が確認調査を実施。平成12年度報告書刊行予定。
ｊ地点　平成11年度に八千代市教育委員会が確認本調査を実施。
４．大溜入遺跡調査会　1982　『おおとめいり遺跡』
５．八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
６．八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
７．八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
８．八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
９．財団法人千葉県文化財センター　1994　『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他　－東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書－』
10．八千代市遺跡調査会　1980　『池ノ台遺跡発掘調査報告』
八千代市教育委員会　1986　『千葉県八千代市池の台遺跡』
八千代市教育委員会　1998　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成９年度』
11．財団法人千葉県文化財センター　1994　『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他　－東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書－』
12．財団法人千葉県文化財センター　1991　『八千代市白幡前遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－』
13．財団法人千葉県文化財センター　1987　『八千代市井戸向遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－』
財団法人千葉県文化財センター　1993　『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－』
14．財団法人千葉県文化財センター　1993　『八千代市坊山遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ－』
15．財団法人千葉県文化財センター　1985　『八千代市北海道遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』
大石理子　1992　「ふるさとの歴史新シリーズ第14回　ボンテン塚」『広報やちよ』平成４年５月15日号（№.582）八千代市
16．財団法人千葉県文化財センター　1985　『八千代市北海道遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』
財団法人千葉県文化財センター　1993　『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－』
17．財団法人千葉県文化財センター　1984　『八千代市権現後遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』
財団法人千葉県文化財センター　1993　『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－』
18．財団法人千葉県文化財センター　1986　『八千代市ヲサル山遺跡　－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』
19．八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
20．八千代市史編さん委員会　1978　『八千代市の歴史』　八千代市
21．八千代市教育委員会　1990　『千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告　平成元年度』
八千代市教育委員会　1993　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成４年度』
八千代市教育委員会　1996　『八千代市埋蔵文化財調査年報　－平成６年度版－』
八千代市教育委員会　1997　『八千代市埋蔵文化財調査年報　－平成７年度版－』
22．八千代市教育委員会　1988　『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告　昭和62年度』
八千代市教育委員会　1989　『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告　昭和63年度』
23．八千代市教育委員会　1983　『八千代の遺跡　－千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－』
24．八千代市教育委員会　1983　『八千代の遺跡　－千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－』
25．千葉県立八千代高等学校史学会　1976　『史学報（第５号）　－八千代市中世城館址－1974年度調査』
26．八千代市遺跡調査会　1980　『阿蘇中学校東側遺跡』
八千代市遺跡調査会　1984　『千葉県八千代市阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』
27．八千代市教育委員会　1996　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成７年度』
28．千葉県立八千代高等学校史学会　1976　『史学報（第５号）　－八千代市中世城館址－1974年度調査』
29．八千代市教育委員会　1983　『八千代の遺跡　－千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－』

30. 八千代市教育委員会　1987　『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告集』
31. 小寺正美　1984　『ふるさと八千代物語』　崙書房
村田一男　1995　「ふるさとの歴史新シリーズ第51回　入定窟」『広報やちよ』平成７年６月15日号（№656）　八千代市
32. 八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
33. 八千代市教育委員会　1990　『千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告　平成元年度』
34. 八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
35. 八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
36. 八千代市教育委員会　1995　『平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
八千代市遺跡調査会　1999　『千葉県八千代市正覚院館跡　－埋蔵文化財発掘調査報告書－』
37. 財団法人千葉県都市公社　1974　『八千代市村上遺跡群』
38. 八千代市教育委員会　1972　『名主山遺跡』
39. 八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
40. 財団法人千葉県都市公社　1974　『八千代市村上遺跡群』
41. 上高野原古墳発掘調査団　1974　『千葉県八千代市村上供養塚発掘調査報告書』
財団法人千葉県都市公社　1974　『八千代市村上遺跡群』
42. 八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
43. 八千代市教育委員会　1995　『平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
44. 八千代市教育委員会　1996　『八千代市埋蔵文化財調査年報　－平成６年度版－』
八千代市教育委員会　1998　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成９年度』
45. 財団法人千葉県文化財センター　1994　『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他　－東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書－』
八千代市教育委員会　1995　『平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
46. 八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
47. 八千代市教育委員会　1983　『八千代の遺跡　－千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－』
48. 八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市

第２節　調査に至る経緯・経過及び調査の方法

上ノ山遺跡を含む八千代市萱田町周辺は近年開発が盛んな地域である。現在、八千代市南部の京成電鉄沿線の地域は、既に市街化されているため遺跡の調査例は非常に少ない。それに対して、平成８年に開通した東葉高速鉄道沿線の地域においては近年開発が盛んになっている。上ノ山遺跡を含む萱田町周辺も東葉高速鉄道の八千代中央駅・村上駅や京成電鉄の大和田駅に比較的近いこともあり、近年宅地造成などの開発が盛んである。これらの開発に伴い上ノ山遺跡では既に３地点において発掘調査が実施されており、谷津を挟んだ北側の台地上に立地する川崎山遺跡に至っては10地点において発掘調査が実施されている。八千代市内において上ノ山遺跡や川崎山遺跡などの萱田町周辺は、近年開発に伴う発掘調査件数が急増している地域の一つであるといえる。

上ノ山遺跡ｂ地点（平成５年度）

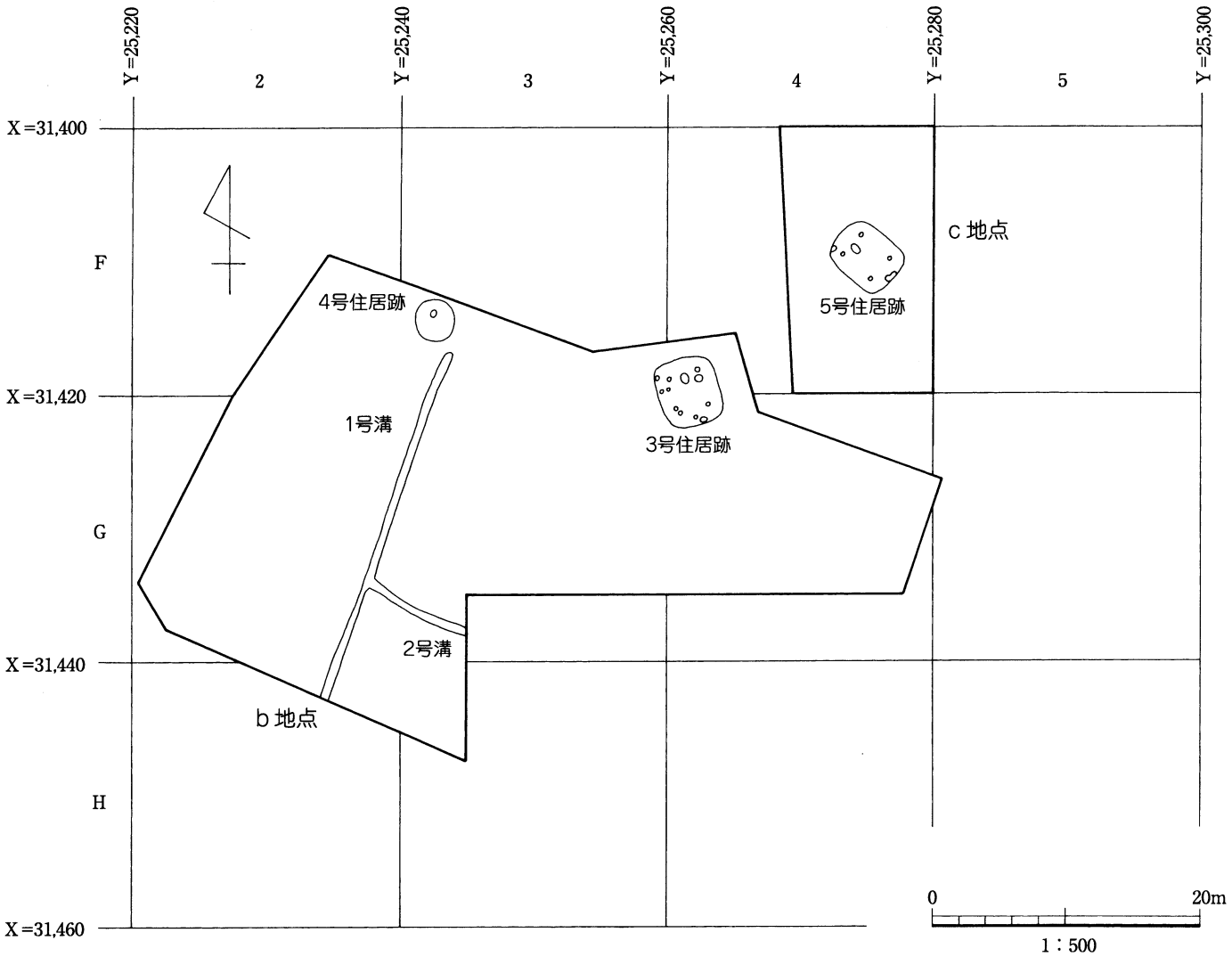
平成５年２月10日付けで中台道子・中台昭氏より八千代市萱田町字上ノ山883-1・894-2の一部の土地について、八千代市教育委員会宛に共同住宅〔フロレスタ上ノ山〕建設に伴う「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて（照会）」が提出された。これを受けて八千代市教育委員会は、照会地が周知の遺跡の範囲内であり、北側近隣地（ａ地点）において昭和61年度に確認調査及び確認本調査を実施し弥生時代後期の住居跡２軒を検出している（註１）ことから、平成５年２月12日付けで照会地に遺跡が所在する旨の回答を行った。その後、八千代市教育委員会と中台道子・中台昭氏の間で埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った結果、事業の計画上現況保存が困難なためやむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

平成５年12月15日から12月27日までの期間、八千代市教育委員会は遺跡の範囲・性格を把握するための確認調査を実施した（註２）。確認調査時の照会地の現況は畑地であった。調査の結果、弥生時代の

第４図　上ノ山遺跡調査範囲図（１：2,000）

住居跡などの遺構を検出した。その後その結果に基づいて、八千代市教育委員会と中台道子・中台昭氏の間で再度協議が重ねられた結果、照会地面積1,997.19㎡のうち遺構が検出された1,200㎡の範囲について本調査を実施することとなった。本調査は、中台道子・中台昭氏の委託を受けて八千代市上ノ山遺跡調査会が、八千代市教育委員会の指導のもと、平成６年２月１日から３月11日までの期間実施した。

本調査は、調査区全体に公共座標に基づく10m間隔の方眼メッシュを組み、北西を起点として西から東へ１、２、３、……、北から南へA、B、C、……のグリッド番号を振り、両者の組み合わせにより地点を表示するグリッドを設定して行った。現地ではまず、重機により調査区内の表土を除去したのち、人力により遺構の検出を行った。その後、検出された各遺構の掘削、土層断面の記録、出土遺物の取り上げ、実測・写真等の記録作業を行った。遺構の調査が終了すると、２ｍ×２ｍを基本とするトレ



第５図　上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点遺構配置図

ンチをグリッドに沿って設定し、旧石器時代の調査を行った。トレンチを1.2m～2.3mの深さまで人力で掘り下げ、土層断面の実測・写真等の記録作業を行い、これにより調査を終了した。調査の結果、旧石器時代遺物出土地点１ヵ所、弥生時代後期住居跡２軒、近世以降の溝２条を検出した。

上ノ山遺跡ｃ地点（平成８年度）

平成８年４月３日付けで中台昭氏より八千代市萱田町字上ノ山883-2・894-1・894-2・927-1の土地について、八千代市教育委員会宛に共同住宅〔フロレスタ上ノ山Ⅱ〕建設に伴う「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて（照会）」が提出された（註３）。これを受けて八千代市教育委員会は、照会地の北側隣接地（ａ地点）及び南側隣接地（ｂ地点）において本調査を実施していることから、平成８年４月15日付けで照会地2,828m²のうちｂ地点との重複部分を除く2,354.68m²について遺跡が所在する旨の回答を行った。その後、八千代市教育委員会と中台昭氏の間で埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った結果、事業の計画上現況保存が困難なためやむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

平成８年６月６日から６月12日までの期間、八千代市教育委員会は遺跡の範囲・性格を把握するための確認調査を実施した（註４）。確認調査時の照会地の現況は畑地であった。調査の結果、弥生時代の住居跡を検出した。その後その結果に基づいて、八千代市教育委員会と中台昭氏の間で再度協議が重ね

られた結果、確認調査面積2,354.68㎡のうち遺構が検出された216㎡の範囲について本調査を実施することとなった。本調査は、調査対象区（萱田町字上ノ山883-2）の土地所有者である中台道子氏の委託を受けて八千代市遺跡調査会が、八千代市教育委員会の指導のもと、平成９年１月10日から１月22日までの期間実施した。

本調査は、調査区全体に公共座標に基づく20m間隔の方眼メッシュを組み、北西を起点として西から東へA、B、C、……、北から南へ１、２、３、……のグリッド番号を振り、両者の組み合わせにより地点を表示する大グリッドを設定して、その内部を５m方眼の小グリッドとして16区画に分割して行った。現地ではまず、重機により調査区内の表土を除去したのち、人力により遺構の検出を行った。その後、検出された遺構の掘削、土層断面の記録、出土遺物の取り上げ、実測・写真等の記録作業を行った。遺構の調査が終了すると、２m×２mのトレンチをグリッドに沿って設定し、旧石器時代の調査を行った。トレンチを0.4m～0.6mの深さまで人力で掘り下げ、土層断面の実測・写真等の記録作業を行い、これにより調査を終了した。調査の結果、弥生時代後期住居跡１軒を検出した。

このように上ノ山遺跡では、ａ地点（昭和61年度）、ｂ地点（平成５年度）、ｃ地点（平成８年度）の隣接した３地点において埋蔵文化財の発掘調査を実施している。なお、遺構番号は本調査の時点では、各地点ごとに遺構の種類別に番号を付した。遺物への注記、図面・写真への記録はこれによる。しかし、本書では調査された地点順に、つまりａ地点から遺構別に通しの遺構番号を新たに付け直した。グリッド番号の表示については、基本的にｂ地点の本調査時の表示方法を採用し、本書ではこれを一部改変して使用している。

（註１）ａ地点は昭和61年度に宅地造成に先行して八千代市遺跡調査会によって確認調査と確認本調査が実施された。確認調査は昭和61年12月４日から12月11日まで、確認本調査は昭和62年３月６日から３月20日まで行われ、弥生時代後期の住居跡２軒が検出された。報告書は未刊行である。
（註２）八千代市教育委員会　1994　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成５年度』
（註３）平成11年度現在、照会地（ｃ地点）の南半部には共同住宅〔フロレスタ上ノ山Ⅱ〕が建設されているが、北半部は発掘調査時の現況のまま畑地として利用されている。
（註４）八千代市教育委員会　1997　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成８年度』

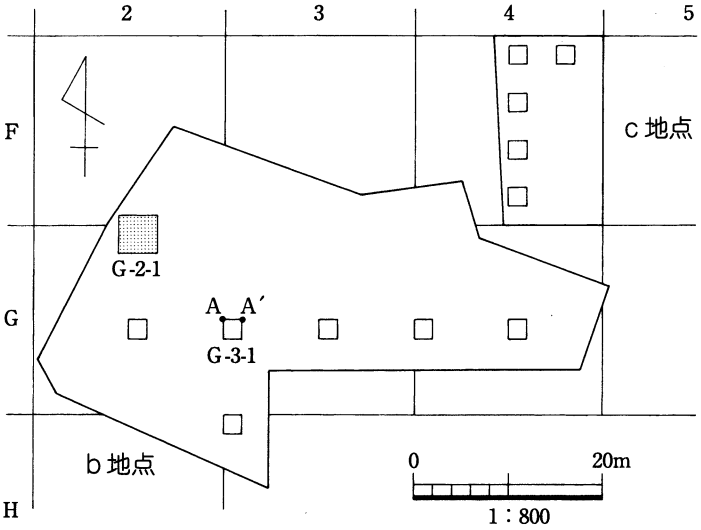
第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

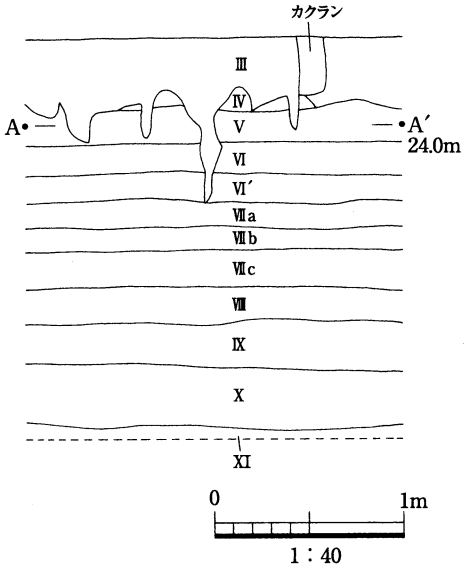
前章で述べたように上ノ山遺跡は新川西岸の小規模な谷津により開析された舌状台地上に位置する。ｂ及びｃ地点調査区は、西側に小谷津を臨む舌状台地の西側斜面から標高23～24ｍを測る台地上平坦部にかけてである。小谷津との比高差は６～８ｍである。現況はｂ及びｃ地点ともに畑地であり、農耕用トレンチャーによる溝状の攪乱が多く認められる。遺構の検出は主にⅢ層（ソフトローム層）の上面で行った。確認調査の結果、ｂ、ｃ地点とも斜面部より遺構は検出されなかった。本調査は台地上平坦部の遺構が検出された部分のみ実施した。その結果、ｂ地点では旧石器時代遺物出土地点１ヵ所、弥生時代後期住居跡２軒、近世以降の溝２条、ｃ地点では弥生時代後期住居跡１軒を検出した。

第２節　旧石器時代

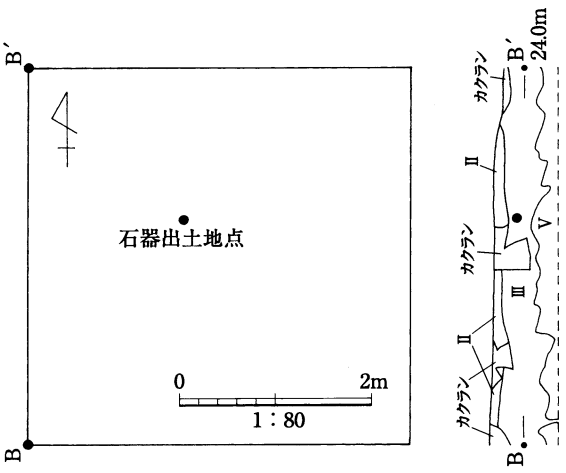
トレンチ調査の結果、ｂ地点のＧ－２－１トレンチより剥片が１点単独で出土した。トレンチを拡張調査したが、これ以上の遺物の出土はなかった。剥片の出土層位はⅢ層の上位である。しかし、剥片は調査中に紛失してしまったため、本書には図示することができなかった。（第６・７・８図、図版３）



第６図　旧石器時代調査トレンチ配置図



第７図　Ｇ－３－１トレンチ土層断面図



第８図　Ｇ－2－1トレンチ遺物出土状況図

土層説明

Ⅰ．耕作土層。
Ⅱ．暗褐色土層。ソフトロームに至る漸移層。
Ⅲ．黄褐色のソフトローム層。
Ⅳ．黄褐色のハードローム層。本遺跡内では局地的に認められる。
Ⅴ．第１黒色帯。暗黄褐色のハードローム層。
Ⅵ．明黄褐色のハードローム層。姶良Ｔｎ火山灰を含む層。火山ガラスを多量に含む。
Ⅵ′．淡暗褐色のハードローム層。Ⅶａに至る漸移層。
Ⅶａ．第２黒色帯の上半部。暗褐色のハードローム層。
Ⅶｂ．第２黒色帯の間層。褐色のハードローム層。本遺跡では局地的に認められる。
Ⅶｃ．第２黒色帯の下半部。暗褐色のハードローム層。Ⅶａよりも暗い色調。
Ⅷ．黄褐色のハードローム層。
Ⅸ．褐色のハードローム層。粘性が強い。
Ⅹ．淡暗褐色のハードローム層。粘性が強い。
Ⅺ．褐色のハードローム層。粘性が強い。

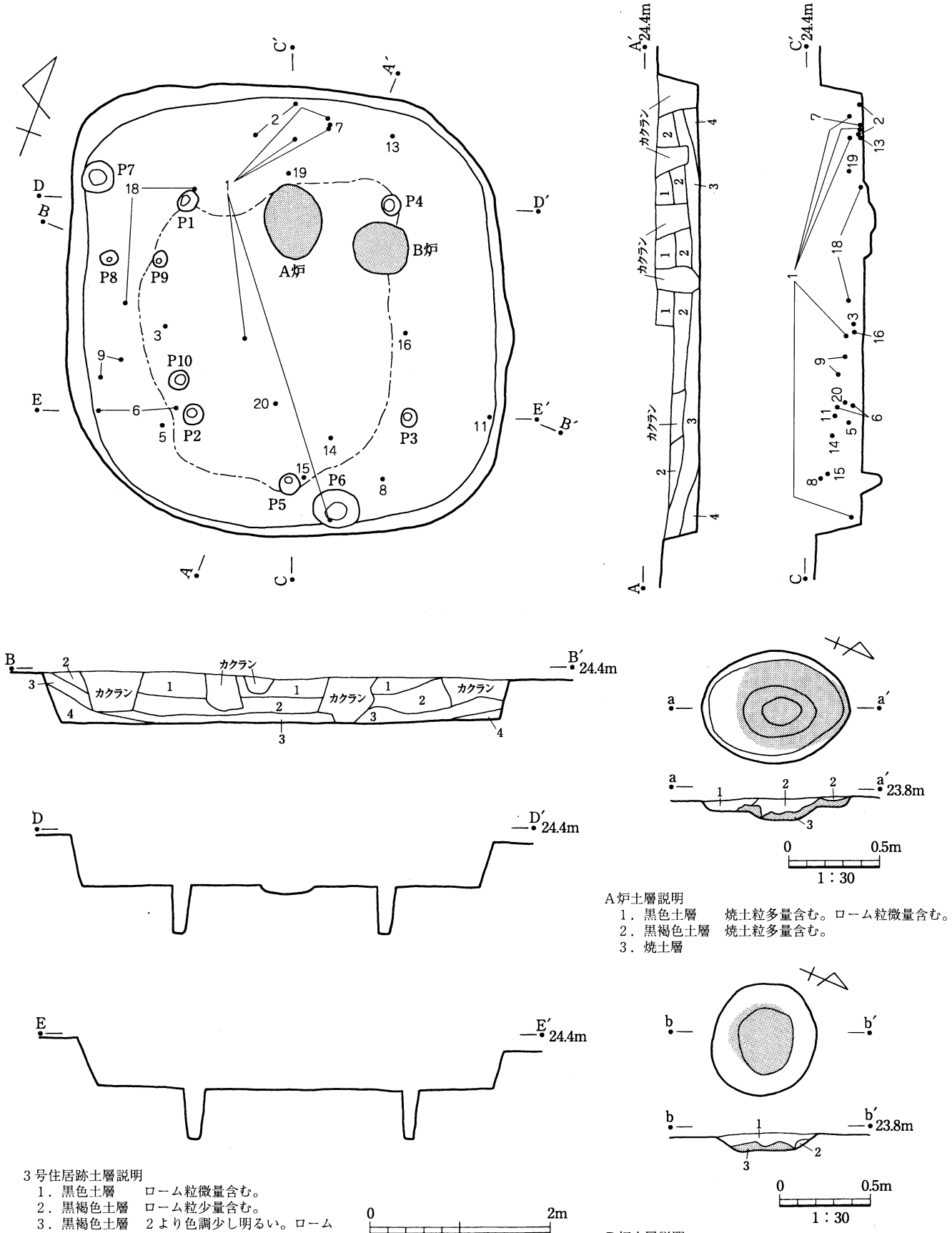
第３節　弥生時代

３号住居跡（第９図、図版３）

位置　Ｆ－４、Ｇ－４グリッド（ｂ地点）。**平面形**　隅丸方形。**主軸方位**　Ｎ－20°－Ｗ。**規模**　長軸4.97m、短軸4.85m、深さ0.52m。**床**　ほぼ平坦なハードロームの地床。床の中央部、主柱穴に囲まれた範囲が硬化している。**ピット**　主柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４で、深さは順に0.53m、0.55m、0.53m、0.52mを測る。Ｐ５は入口部施設に関連する柱穴で、深さ0.23mを測る。その他、Ｐ６、Ｐ７、Ｐ８、Ｐ９、Ｐ10が検出されており、深さは順に0.12m、0.26m、0.40m、0.31m、0.40mを測る。**周溝**　検出されなかった。**炉**　２基検出されている。Ａ炉は中央から北寄りに位置している。平面楕円形の掘り込みで、底面は少し凹凸がある。規模は、長軸0.83m、短軸0.62m、深さ0.06m。底面中央は更に0.05mくぼんでいる。被熱状態は良好である。Ｂ炉はＡ炉の東、Ｐ４の南に位置している。平面ほぼ円形の掘り込みで、底面は少し凹凸がある。規模は、長軸0.61m、短軸0.57m、深さ0.09m。被熱状態は良好である。

出土遺物（第10図、図版５・６）　１は弥生土器の甕であり、床面直上～床上約15cmの範囲で出土する。口縁部は上方からの刺突により波状口縁を呈しており、頸部はハケ整形の後にナデが施されている。頸・胴部界は輪積痕が残されており、段になっている部分には板状工具による斜め上方からの刺突が加えられている。２は弥生土器の高坏であり、出土位置はほぼ床面直上である。口縁部は刻みが施されており脚部と坏部の接合部は指頭押圧による整形が施されている。器面の剥落が激しいため全体の調整は不明であるが、残存する部分を観察する限り、内外面ともミガキが加えられており、特に内面においては部分的に赤彩された痕跡が見られる。３は弥生土器の無頸壺である。確認調査時に床上約15cmから出土する。器面は内外面ともハケ整形の後にナデが施されている。また部分的に赤彩が確認できる。口縁部付近には２個１単位の孔が内面から外面に向かって２ヵ所に穿たれている。本資料は一見すると底部穿孔土器にも見えるが断面の観察から廃棄後に破損したものと考えられる。４はミニチュア土器である。Ａ炉より出土した。外面は指頭押圧の後にナデ整形が施されており、内面には部分的に輪積痕が観察される。５～７は弥生土器の甕の底部である。何れの土器も内外面ともナデ調整が行われているが、７のみナデ調整の前にハケ調整が行われている。８・９は弥生土器の壺の底部である。両者とも内外面の調整はナデ調整である。また胎土は白色粒子及び砂粒を多く含むといった特徴を持つ。10～14は弥生土器の壺である。10は口縁部片であり単節縄文による羽状縄文が施文されている。11は頸部片であり単節縄文が施文されているが恐らく羽状構成をとるものと思われる。12・13は肩部片であり同一個体である。Ｓ字状結節文を施文した後に沈線区画を行っている。また器面は丁寧にミガキが施されている。14は口縁部片である。複合口縁を呈する口縁部に網目状撚糸文を施文し、下端にヘラ状工具による刻みを施す。15は弥生土器の浅鉢の口縁部片である。内外面ともナデ調整を施す。16～20は弥生土器の甕である。16～18は口縁部片であり、16・17は棒状工具による刺突がなされ内外面ともハケ調整が施されている。18は輪積痕が観察され、器面はナデ調整が行われている。19は頸～胴部片で頸部は無文帯で胴部には単節縄文ＲＬが施文されている。20は胴部片で付加条縄文１種付加１条ＲＬ＋Ｌが施文されている。両者ともナデ調整が施されている。21は土師器の坏である。器形は緩やかなカーブを描き直立する口縁を持つものと思われる。外面はヘラケズリが、内面はナデが施される。以上の特徴から古墳時代中期に位置づけられる。22は陶器碗の胴部である。ロクロ成形されており内面には釉が施されている。

以上の遺物の特徴及び出土状況から本住居跡は弥生時代後期後葉と位置づけることが可能である。

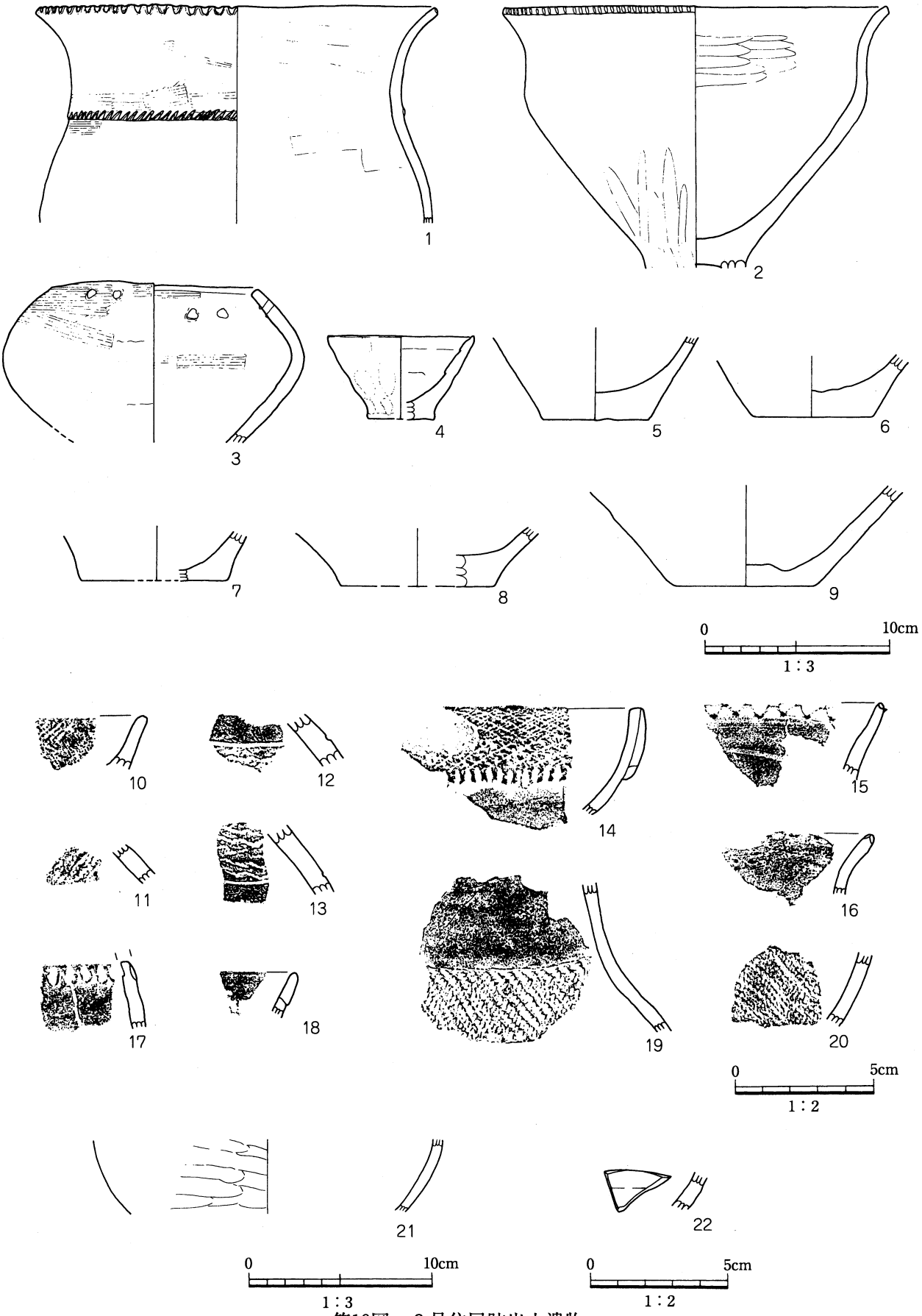


A炉土層説明
1．黒色土層　焼土粒多量含む。ローム粒微量含む。
2．黒褐色土層　焼土粒多量含む。
3．焼土層

B炉土層説明
1．黒色土層　焼土粒及びローム粒微量含む。
2．暗褐色土層　焼土粒少量含む。
3．焼土層

3号住居跡土層説明
1．黒色土層　ローム粒微量含む。
2．黒褐色土層　ローム粒少量含む。
3．黒褐色土層　2より色調少し明るい。ローム粒少量含む。
4．暗褐色土層　ローム粒及びロームブロック少量含む。

第9図　3号住居跡実測図



第10図　3号住居跡出土遺物

第１表　３号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	種　別	器　種	胎　土	焼成	色　調	備　考
1	弥生土器	甕	若干の砂粒を含み白色粒が顕著	良好	褐色	残存率約25%
2	弥生土器	高坏	白色粒を多く含む	良好	褐色	残存率約25%
3	弥生土器	無頸壺	緻密	良好	赤褐色	残存率約90%
4	弥生土器	ミニチュア土器	緻密	良好	赤褐色	残存率約25% A炉出土
5	弥生土器	甕	緻密	良好	明褐色	残存率10%未満
6	弥生土器	甕	緻密	良好	(外)褐色 (内)黒色	残存率約10%
7	弥生土器	甕	緻密	良好	暗褐色	残存率約５% 床面直上出土
8	弥生土器	壺	砂粒を多く含む	良好	赤褐色	残存率約５%
9	弥生土器	壺	白色粒子を多く含む	良好	赤褐色	残存率約10%
10	弥生土器	壺	白色粒子を多く含む	良好	黄赤褐色	
11	弥生土器	壺	白色粒子を多く含む	脆い	黄褐色	
12	弥生土器	壺	緻密	良好	黒褐色	
13	弥生土器	壺	緻密	良好	暗赤褐色	床面直上出土
14	弥生土器	壺	緻密	良好	(外)暗褐色 (内)黒褐色	
15	弥生土器	浅鉢	緻密	良好	黒褐色	
16	弥生土器	甕	緻密	良好	暗褐色	
17	弥生土器	甕	緻密	良好	暗赤褐色	
18	弥生土器	甕	長石を含む	良好	暗赤褐色	
19	弥生土器	甕	白色粒を若干含む	良好	暗褐色	
20	弥生土器	甕	緻密	良好	暗褐色	
21	土師器	坏	長石粒を含む	良好	明褐色	残存率約20%
22	陶器	碗	緻密	良好	黄白色	

４号住居跡（第11図、図版４）

位置　Ｆ－３グリッド（ｂ地点）。**平面形**　楕円形。**主軸方位**　Ｎ－５°－Ｗ。**規模**　長軸3.10m、短軸2.92m、深さ0.15m。**床**　トレンチャーによる溝状の攪乱を大きく受けている。ほぼ平坦なソフトロームの地床。中央部が硬化している。**ピット**　検出されなかった。トレンチャーによる攪乱により消失してしまった可能性も考えられる。**周溝**　検出されなかった。**炉**　中央から北寄りに位置している。トレンチャーによる攪乱のため北壁を消失している。平面楕円形の掘り込みで、底面はほぼ平坦である。規模は、長軸0.35m以上、短軸0.35m、深さ0.10m。被熱状態は良好である。

出土遺物（第12図、図版６）　１は弥生土器の甕の口縁部片である。口縁部は上方から棒状工具による刺突が加えられ波状口縁となっている。器面は内外面ともナデ調整が施されている。２は弥生土器の甕の底部である。内外面ともナデ調整が施されている。なお２点とも床面直上から出土している。

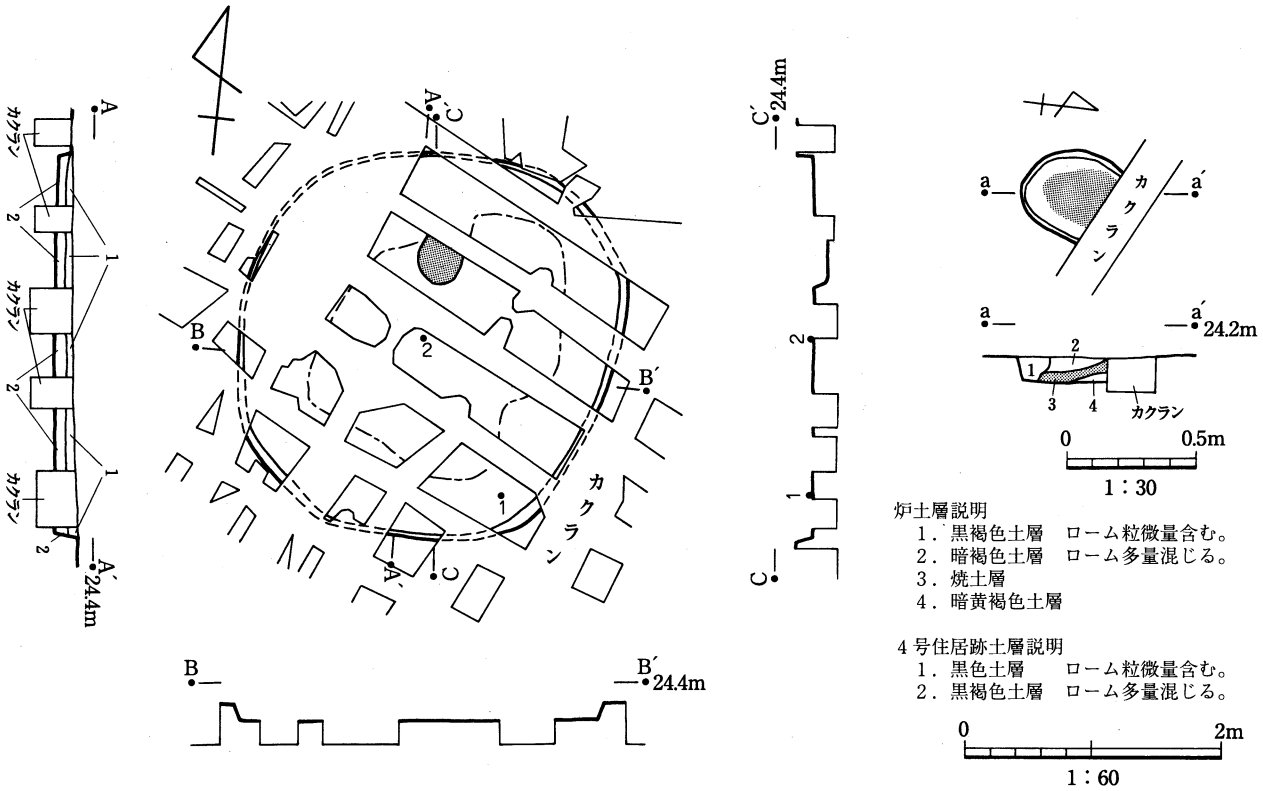
以上の遺物の特徴及び出土状況から本住居跡は弥生時代後期後葉と位置づけられる。

第２表　４号住居跡出土遺物観察表

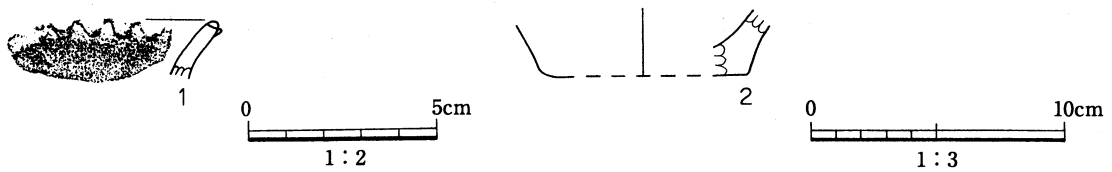
遺物番号	種　別	器　種	胎　土	焼成	色　調	備　考
1	弥生土器	甕	微細な雲母･白色粒子等を含む	良好	黄褐色	床面直上出土
2	弥生土器	甕	微細な長石粒を含む	良好	(外)暗褐色 (内)黒褐色	床面直上出土 残存率約５%

５号住居跡（第13図、図版４）

位置　Ｆ－４グリッド（ｃ地点）。**平面形**　隅丸方形。**主軸方位**　Ｎ－54°－Ｗ。**規模**　長軸4.68m、短軸4.07m、深さ0.58m。**床**　ほぼ平坦なハードロームの地床。床の中央部、主柱穴に囲まれた範囲が



第11図　4号住居跡実測図

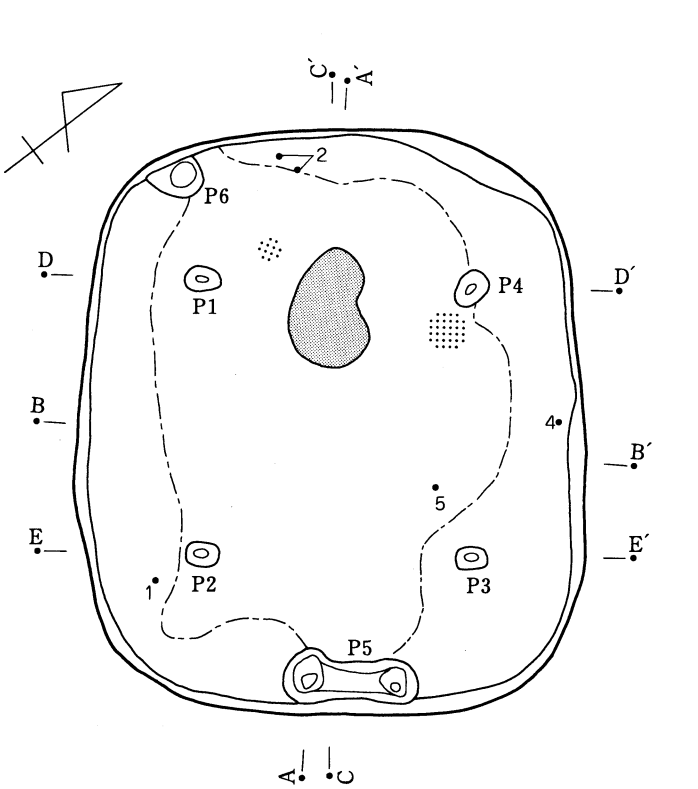


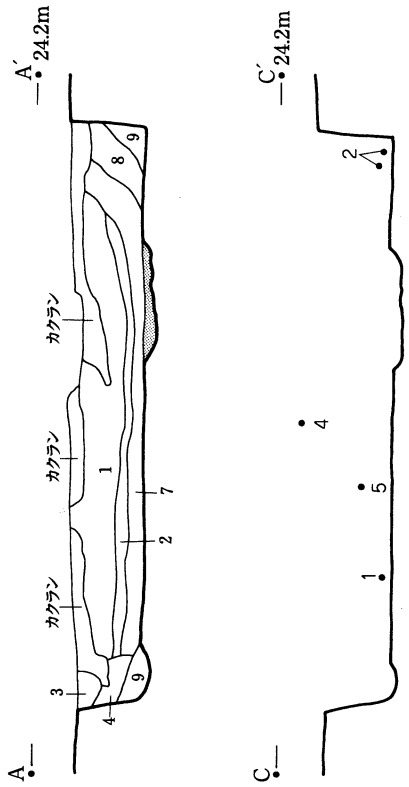
第12図　4号住居跡出土遺物

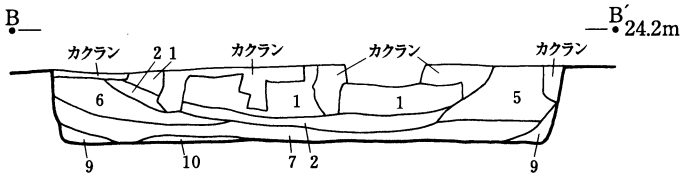
硬化している。また、炉の周辺の床面にて2カ所の被熱部分を検出した。被熱の範囲は0.20m×0.20mと0.30m×0.30mである。**ピット**　主柱穴はP1、P2、P3、P4で、深さは順に0.82m、0.71m、1.14m、1.27mを測る。南西側のP1、P2が浅く、北東側のP3、P4が深い。P5は入口部施設に関連する柱穴で、深さ0.12mと0.16mのピットが連結したような形をしている。連結部の深さは0.08mを測る。P6は深さ0.13mを測る。**周溝**　検出されなかった。**炉**　中央から北寄りに位置している。平面不整楕円形の掘り込みで、底面は凹凸に富んでいる。規模は、長軸0.95m、短軸0.60m、深さ0.08m。被熱状態は良好である。

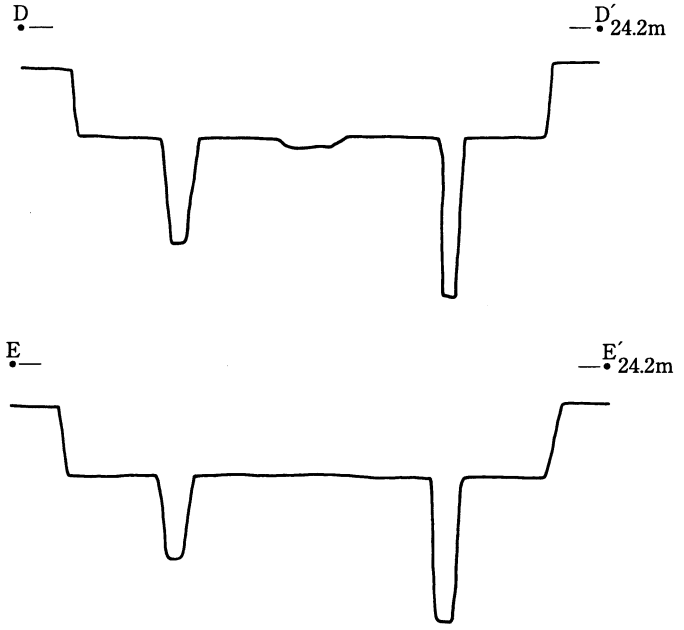
出土遺物（第14図、図版6）　1は弥生土器の壺の底部である。緩やかに立ち上がる器面は赤彩されている。2は弥生土器の甕の底部である。器面は内外面ともナデ調整が施されている。3は弥生土器の壺の肩部であり、P1より出土した。単節LR縄文による斜行構成をとっている。なお縄文帯の上方は赤彩されている。4は弥生土器の壺の肩～胴部である。器面には斜め方向に竹管状工具による刺突列が確認される。配列から山形文になるものと思われる。なお外面は丹念にミガキ調整が施され、内面はナデ調整が施されている。5は弥生土器の甕の口縁部片である。やや外反する器形を呈し、器面には付加条縄文1種付加2条RL＋2Lが施文され、口唇部にも同一原体を回転施文している。また内面はハケ整形の後ナデ整形を行っている。6は弥生土器の甕の頚～胴部片である。頚部は付加条縄文1種付加2条RL＋2Lを施文し、その下に狭い無文帯を配する。胴部は頚部と同一原体により施文される。

以上の遺物の特徴から本住居跡は弥生時代後期後葉に位置づけられる。



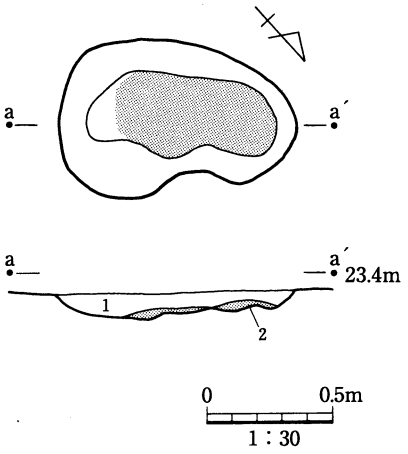






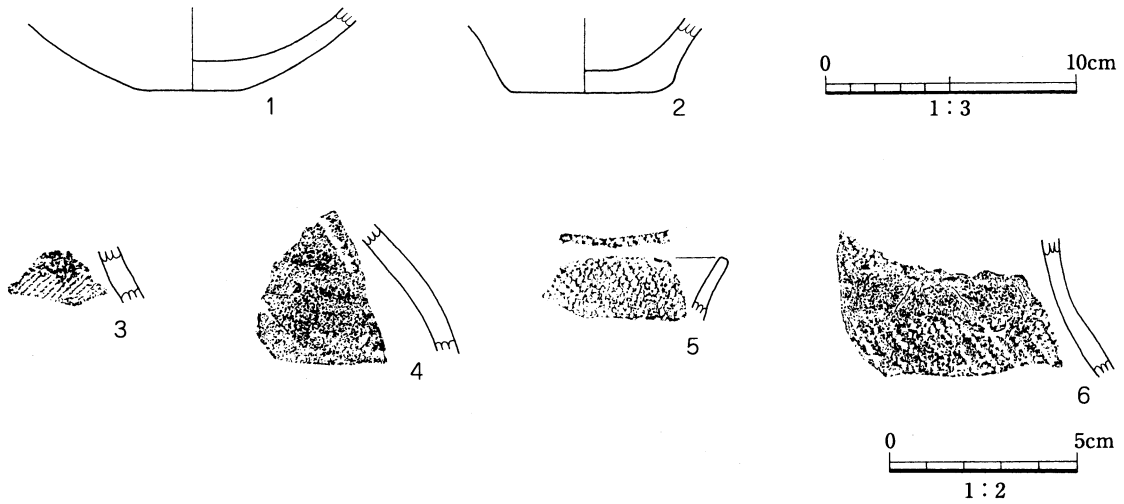
0　2m
1：60

5号住居跡土層説明
1．黒色土層　ローム粒微量含む。
2．黒褐色土層　黒色土及びローム少量混じる。
3．暗褐色土層　暗褐色土及びローム少量混じる。
4．暗褐色土層　ローム少量混じる。ローム粒少量含む。
5．黒褐色土層　黒色土及びローム少量混じる。
6．暗褐色土層　ローム少量混じる。ローム粒少量含む。
7．暗褐色土層　ローム粒及びロームブロック少量含む。
8．暗褐色土層　ローム少量混じる。ローム粒少量含む。
9．黒褐色土層　ローム粒少量含む。
10．暗褐色土層　ローム粒少量含む。



炉土層説明
1．黒色土層　焼土粒及びローム粒微量含む。
2．焼土層

第13図　5号住居跡実測図



第14図　５号住居跡出土遺物

第３表　５号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	種　別	器　種	胎　土	焼成	色　調	備　考
1	弥生土器	壺	砂粒を多く含む	良好	赤褐色	残存率約５％
2	弥生土器	甕	微細な長石粒を多く含む	良好	(外)暗褐色　(内)黒色	残存率約５％
3	弥生土器	壺	白色粒を多く含む	良好	暗赤褐色	Ｐ１内出土
4	弥生土器	壺	白色粒を多く含む	良好	暗褐色	
5	弥生土器	甕	緻密	良好	暗褐色	
6	弥生土器	甕	雲母･長石粒を多く含む	良好	黒色	

第４節　近世以降

１号溝（第15図、図版４）

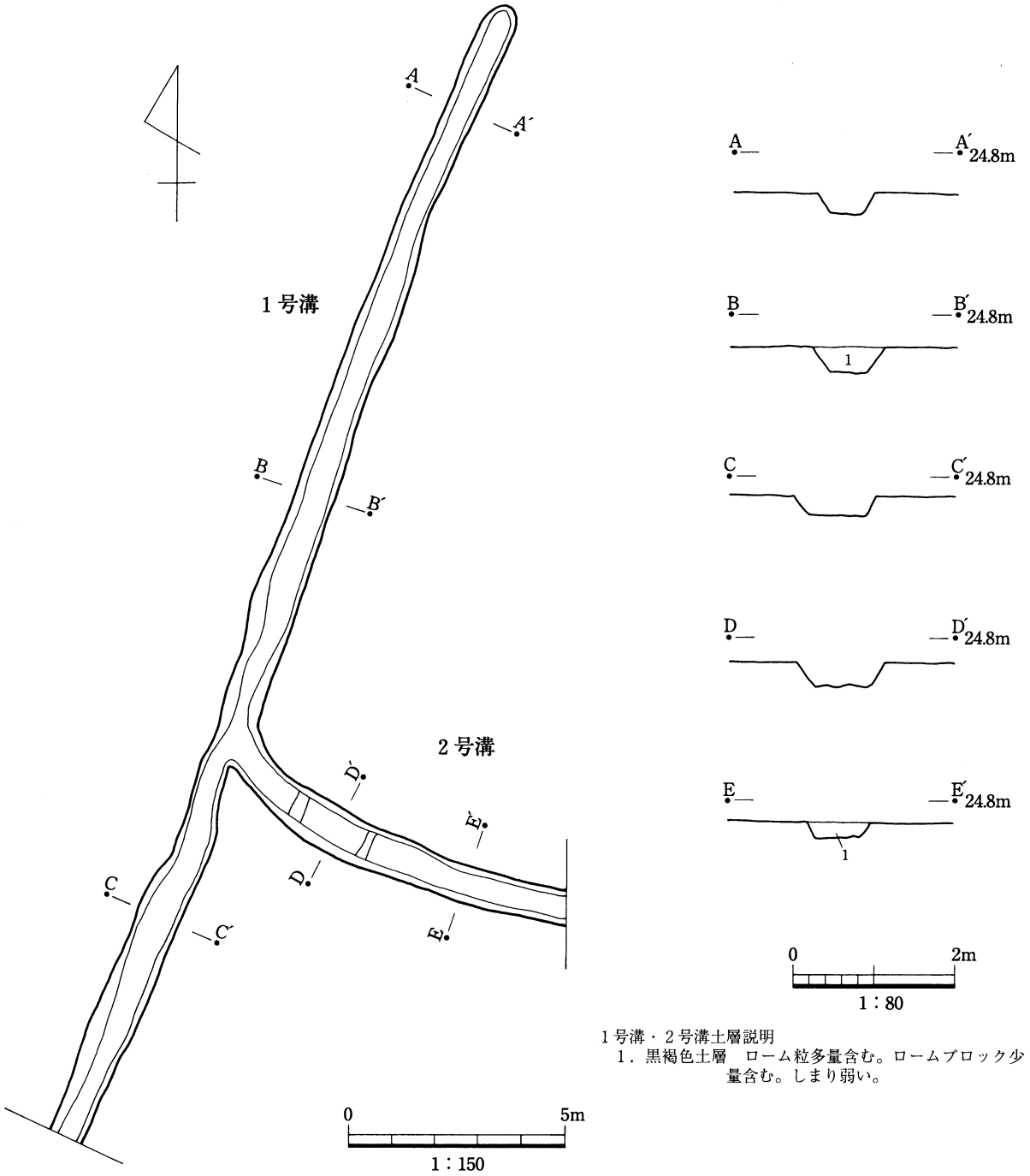
１号溝は、ｂ地点のＨ－２グリッドからＧ－２・３、Ｆ－３グリッドにかけて検出された。南西から北東へ調査区を縦断し、Ｆ－３グリッドにて終息している。また、Ｇ－２グリッドにて２号溝と分岐している。規模は幅0.65～1.10m、深さ0.20～0.30mを測り、調査区内における検出部分の長さは28.25mを測る。断面は逆台形を呈しており、底面には少し凹凸がある。全体においてトレンチャーの影響を大きく受けている。

出土遺物（第16図、図版６）　１は陶器の鉢である。ロクロ成形が行われており、器面は内外面とも鉄釉が施されている。２は須恵器の坏である。底部は手持ちヘラケズリが施されている。３は陶器の擂鉢である。ロクロ成形が行われており器面は内外面とも鉄釉が施されている。また内面は７本１単位の条線が引かれており、口縁部付近は横位のナデが施され凹線状になっている。４は陶器の碗である。ロクロ成形された破片の上端には緑釉が施されている。５は鉄製刀子であり重量は10.4ｇを計る。刃部の断面は三角形を呈する。なお、目釘穴は確認できなかった。

以上の出土遺物から、須恵器の出土が認められるものの、近世以降の陶器が出土遺物の主体を占めることから本遺構は近世以降に掘られたものと考えられる。

第４表　１号溝出土遺物観察表

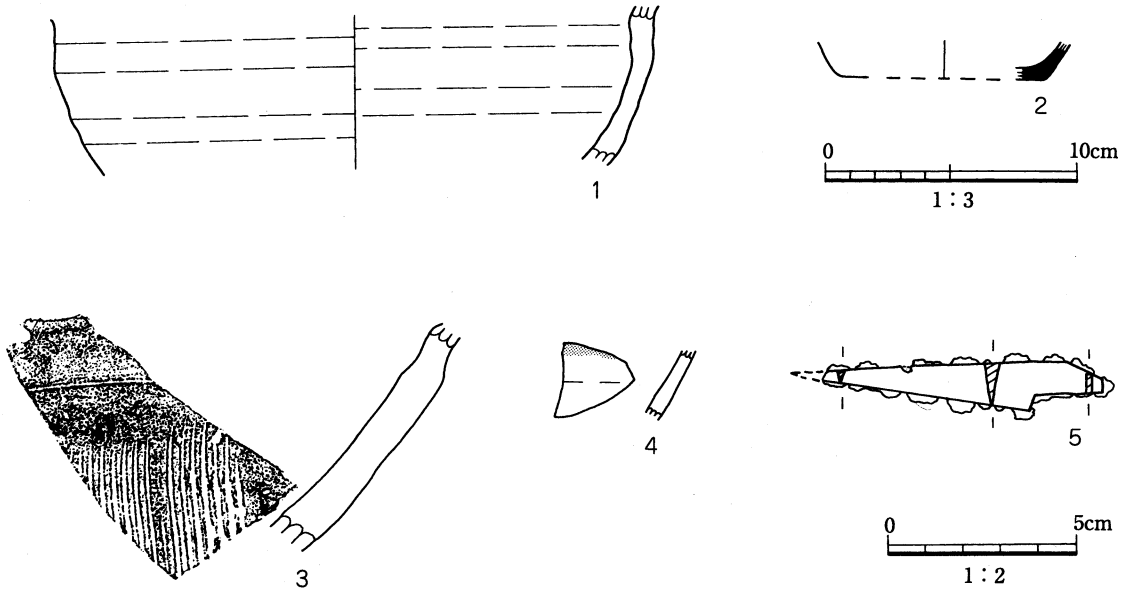
遺物番号	種　別	器　種	胎　土	焼成	色　調	備　考
1	陶器	鉢	緻密	良好	赤色	残存率約５％
2	須恵器	坏	緻密	良好	青灰色	残存率５％未満
3	陶器	擂鉢	緻密	良好	赤褐色	
4	陶器	碗	緻密	良好	褐色	
5	鉄製品	刀子	—	—	—	ほぼ完形



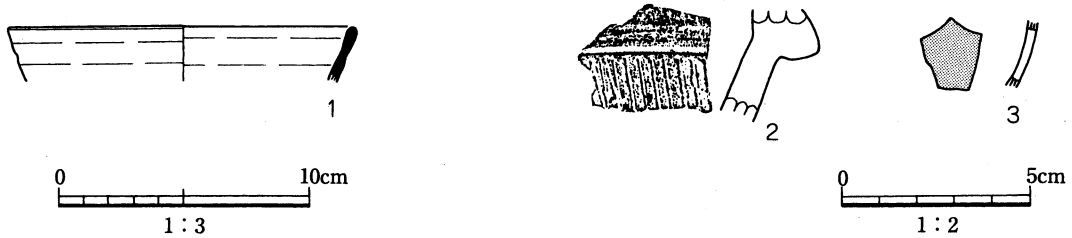
第15図　1号溝及び2号溝実測図

2号溝（第15図、図版4）

2号溝は、b地点のG－2・3グリッドにおいて検出された。G－2グリッドで1号溝より分岐し、緩やかなカーブを描いて東に向かい調査区外へ延びている。規模は幅0.80～1.00m、深さ0.15～0.25mを測り、調査区内における検出部分の長さは7.90mを測る。断面は逆台形を呈しており、底面には少し凹凸がある。また、深さ0.12mのピットも1基検出されている。全体においてトレンチャーの影響を大きく受けている。



第16図　1号溝出土遺物



第17図　2号溝出土遺物

出土遺物（第17図、図版7）　1は須恵器の坏である。口縁端部はナデ整形が施され、やや丸みを帯びている。体部はロクロ成形が行われている。2は陶器の擂鉢である。ロクロ成形が行われ、内面には縦方向に条線が施され、破片上端は横位方向にナデ整形が行われている。なお、器面は内外面とも釉が施されている。3は陶器の碗である。器面には内外面とも釉が施されている。

以上の出土遺物から、須恵器の出土は認められるものの、近世以降の陶器が出土遺物の主体を占めることから本遺構は近世以降に掘られたものと思われる。

第5表　2号溝出土遺物観察表

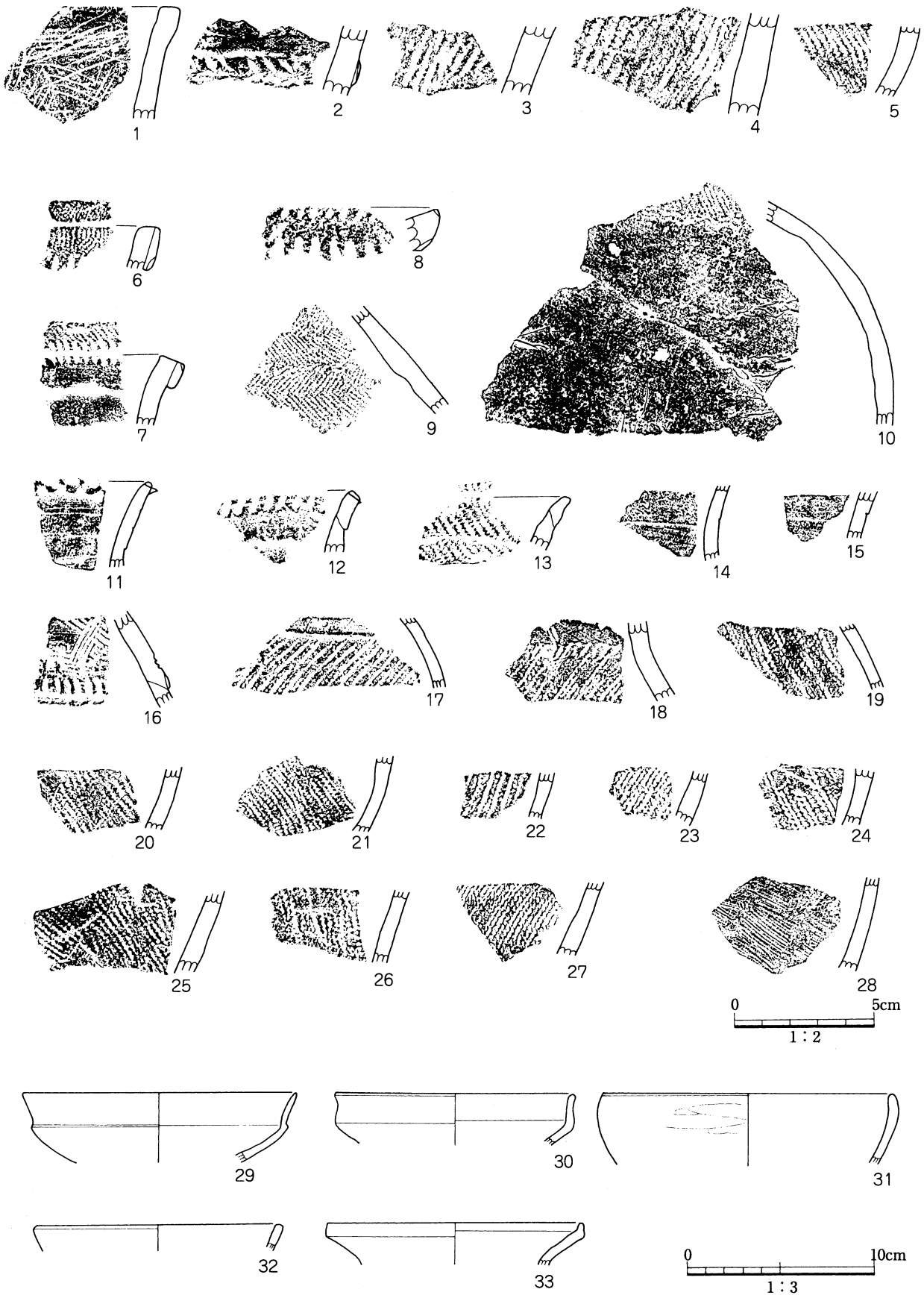
遺物番号	種　別	器　種	胎　土	焼成	色　調	備　考
1	須恵器	坏	若干の長石粒を含む	良好	青灰色	残存率5％未満
2	陶器	擂鉢	緻密	良好	褐色	
3	陶器	碗	緻密	良好	緑灰色	

第5節　遺構外出土遺物

前節までの通り、上ノ山遺跡では旧石器時代、弥生時代、近世以降の遺構が検出されているが、調査区域内では遺構に伴わない遺物が、多岐の時代に渡って採集されている。以下、採集遺物の説明を行っていく。

縄文土器（第18図、図版7）

1～5がこれにあたる。1は横位直線文を施文した後、鋸歯文を施文する。また2は粘土紐貼り付け



第18図　遺構外出土遺物(1)

隆帯上にヘラ状工具による刺突列を配する。以上の特徴から１・２は縄文時代前期浮島式土器と考えられる。３～５はいずれも単節縄文を施文したものである。３・４はＬＲ、５はＲＬ単節縄文を施文する。また焼成が非常によく、器厚が非常に厚いといった特徴があげられる。以上のことから縄文時代中期に位置づけられるものと思われる。

弥生土器（第18図、図版７）

６～27がこれにあたる。６～８は壺の口縁部片であり、６は口唇部上及び外面に単節縄文ＬＲを施文する。口縁部下端はキザミが施されている。７は口唇部に単節縄文ＲＬが施され、口唇端部にはキザミが施される。８は縄文施文が見られないものの、唇端部・口縁部下端の両方にキザミが施される。９・10は壺の肩～胴部片である。９は単節縄文により多段の羽状構成をとっており、破片中央にはＳ字状結節文が認められる。10はＳ字状結節文区画内に単節縄文が施文されている。恐らく羽状構成をとるものと思われる。11～13は甕の口縁部である。11・12は口唇部上にそれぞれヘラ状工具による押圧を加えており波状口縁を呈している。13は口唇部上と輪積痕上に単節縄文ＲＬを施文する。14・15は甕の口辺部である。いずれも輪積痕を持つ。16～18は甕の頚～胴部である。16は３本櫛歯状工具により格子目文、簾状文を施文する。頚・胴部は輪積痕によって区画され、輪積痕上はヘラ状工具による刺突列が巡る。簾状文の施文方法は当地域の施文方法とは異なり、他地域の影響が考えられる。17・18はいずれも頚部を無文とし胴部に付加条縄文１種付加２条ＬＲ＋２Ｒを施文する。19～27は甕の胴部である。いずれも、付加条縄文を施文するものである。以上のように、遺構外出土の弥生土器は住居跡出土資料と同様、南関東的特徴が比較的強いことがわかる。

土師器（第18・19図、図版７・８）

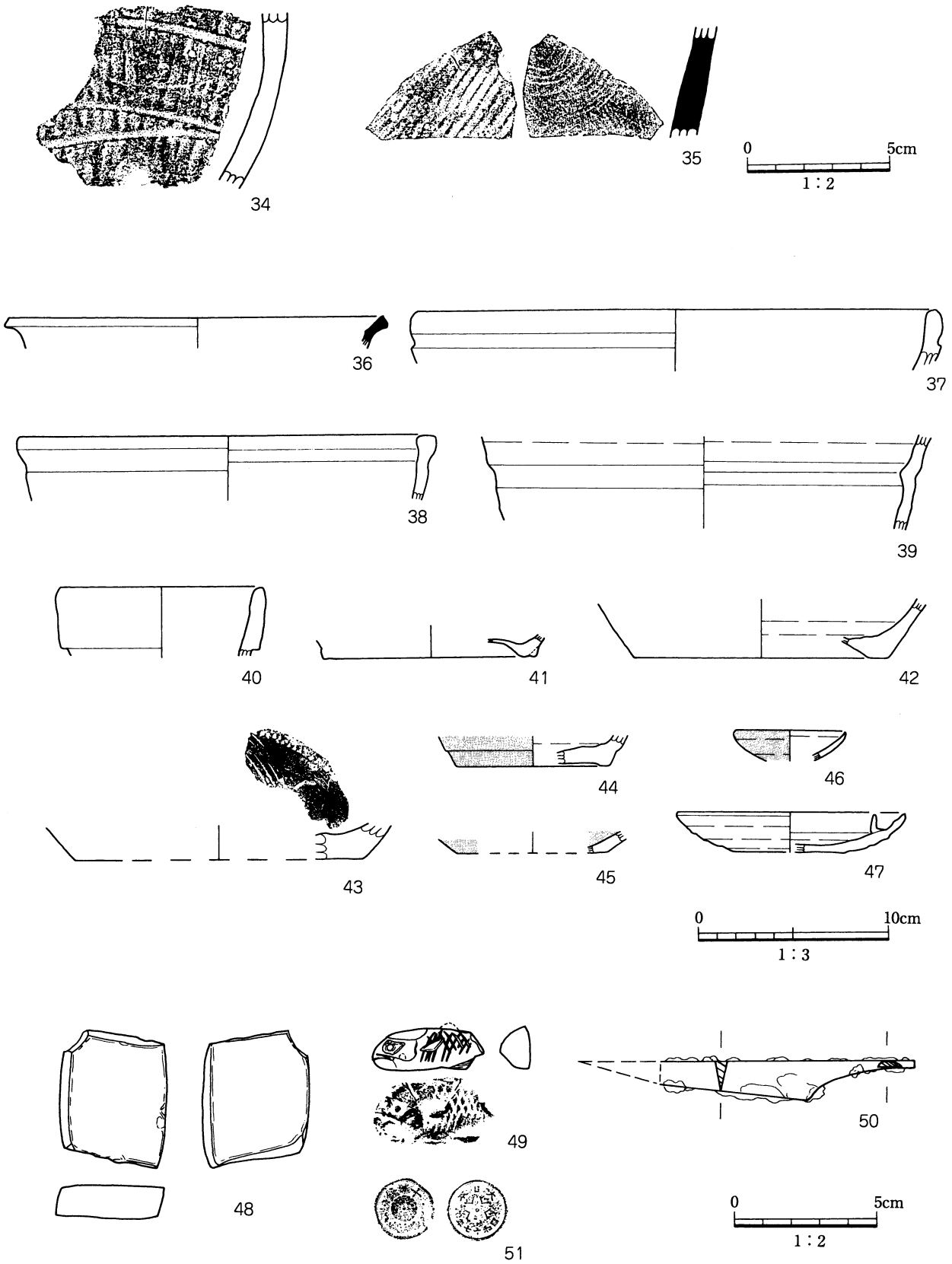
28～34がこれにあたる。28は甕の胴部であり、全面に細かなハケ整形が施されている。以上の特徴から古墳時代前期に位置づけられる。29・30須恵器（坏蓋）模倣坏である。両者とも器高中央で稜をもち外傾する器形である。稜は29がやや鋭いものの、30は丸みをかなり帯びている。また口縁部も29と比較して30は口縁部がやや外反する程度である。以上の特徴からこれらの土器は古墳時代後期から７世紀代に位置づけられる。31・32はともに坏である。31はやや内湾する口縁部をもち体部はヘラケズリが施される。一方、32は口唇部にナデ調整が行われていること以外の調整は不明である。以上のことから31は古墳時代後期から７世紀に、32は７世紀以降に位置づけられる。33は小型甕である。口唇部は直立し、器形はやや急に窄まっていく。以上の特徴から８世紀後半以降に位置づけられる。34は甕の胴部片である。タタキ調整が施された後に浅くやや太い棒状工具による調整が行われている。平安時代の所産であろう。

須恵器（第19図、図版８）

35・36がこれにあたる。35は甕の胴部である。外面はタタキ目が残り、内面には当て具痕（青海波文）が確認できる。内面は摩耗が激しく、硯等の二次的な使用があった可能性が考えられる。36は甕であり、口縁部は外に突出している。

陶磁器類（第19図、図版８）

37～47がこれにあたる。37は陶器の擂鉢であり、口辺部には一条の凹線が引かれており、口縁部断面は丸味を帯びている。38は37に比較的類似するが、内面にも凹線を持つことや、口唇部に平坦面を持つなどの特徴が挙げられる。39は陶器の鉢であり、ロクロ成形で内外面とも釉が施されている。40は複合口縁をもった陶器であり、碗の可能性がある。41・42は急須の底部である。上げ底になり接地面が少ない底部をもつ41は、器を支える為に、底部付近の外面に半球形の粘土を貼り付け安定させている。恐らく４ヵ所についていたものと考えられる。なお、内面は釉が施されている。42も41と同様上げ底である。



第19図　遺構外出土遺物(2)

43は擂鉢である。内面に条線が施されている。44・45は陶器の碗である。44は底部付近に段を持ち、やや上げ底になっている。また外面に釉が施されている。45は内外面とも釉が施されている。46は陶器の小皿であり、ロクロ成形の器面には釉が施されている。47は灯明皿であり、内面の口縁部に比較的近い部位に突出部を持っている。また器面にはロクロ成形痕が明瞭に残っている。これらの遺物の詳細は不明であるが恐らく近世以降の所産であるものと考えられる。

その他の遺物（第19図、図版８）

48は砥石である。四辺が丸みを帯びた長方形を呈しており、表面・裏面とも若干の擦痕を観察できる。重量は36.2ｇである。49は魚型の泥面子である。カマボコ型の断面を持ち、非常に細い工具により口・目・鱗・腹鰭の線を描いている。重量は4.7ｇである。50は刀子である。刃部断面は三角形を呈し、柄部の断面は半月形である。重量は14.2ｇである。51は昭和17年製の菊10銭アルミ貨幣である。重量は1.2ｇで、戦時下における物資不足から前年より重量が0.3ｇ軽くなっている。

第６表　遺溝外出土遺物観察表

遺物番号	種　別	器　種	胎　土	焼成	色　調	備　考
1	縄文土器	深鉢	長石･砂粒を多く含む	良好	赤褐色	
2	縄文土器	深鉢	長石を含む	良好	(外)赤褐色　(内)暗黄褐色	
3	縄文土器	深鉢	雲母･長石粒を含む	良好	赤褐色	
4	縄文土器	深鉢	微細な長石粒･雲母を含む	良好	赤褐色	
5	縄文土器	深鉢	緻密	良好	黄褐色	
6	弥生土器	壺	白色粒を含む	良好	黄褐色	
7	弥生土器	壺	緻密	良好	黒褐色	
8	弥生土器	壺	石英･長石･白色粒子を多量に含む	良好	黄褐色	
9	弥生土器	壺	白色粒子を多く含む	良好	赤褐色	
10	弥生土器	壺	白色粒子を多く含み脆い	良好	暗黒褐色	
11	弥生土器	甕	白色粒子を若干含む	良好	暗褐色	
12	弥生土器	甕	緻密	良好	暗褐色	
13	弥生土器	甕	長石を含む	良好	暗赤褐色	
14	弥生土器	甕	白色粒を多く含む	良好	黒褐色	
15	弥生土器	甕	長石粒を多く含む	良好	褐色	
16	弥生土器	甕	緻密	良好	赤褐色	
17	弥生土器	甕	長石粒を多く含む	良好	暗褐色	
18	弥生土器	甕	微細な白色粒、雲母粒を混入	良好	赤褐色	
19	弥生土器	甕	長石粒を若干混入	良好	(外)赤褐色　(内)黒色	
20	弥生土器	甕	長石粒を含む	良好	黄赤褐色	
21	弥生土器	甕	長石･石英を多く含む	良好	黒褐色	
22	弥生土器	甕	長石粒を含む	良好	赤褐色	
23	弥生土器	甕	緻密	良好	赤褐色	
24	弥生土器	甕	長石を若干含む	良好	(外)黒色　(内)赤褐色	
25	弥生土器	甕	白色粒及び雲母を若干含む	良好	暗褐色	
26	弥生土器	甕	雲母を若干含む	良好	(外)赤褐色　(内)黒褐色	
27	弥生土器	甕	微細な長石･石英粒を含む	良好	(外)赤褐色　(内)黒色	
28	土師器	甕	緻密	良好	黒褐色	
29	土師器	坏	緻密	良好	赤褐色	残存率約５％
30	土師器	坏	微細な長石粒を含む	良好	黒色	残存率約５％
31	土師器	坏	緻密	良好	赤色	残存率約５％
32	土師器	坏	長石粒を若干含む	良好	赤褐色	残存率約５％
33	土師器	小型甕	微量の雲母粒を含む	良好	明褐色	残存率約10％
34	土師器	甕	長石･雲母を若干含む	良好	黒褐色	
35	須恵器	甕	緻密	良好	青灰色	

36	須恵器	甕	緻密	良好	青灰色	残存率約５％
37	陶器	擂鉢	微量の雲母を含む	良好	暗褐色	残存率約５％
38	陶器	鉢	緻密	良好	緑白色	残存率約５％
39	陶器	鉢	緻密	良好	暗灰色	残存率約５％
40	陶器	碗	緻密	良好	黄褐色	残存率約５％
41	陶器	急須	緻密	良好	薄緑色	残存率約10％
42	陶器	急須	緻密	良好	褐色	残存率約５％
43	陶器	擂鉢	砂粒を非常に多く含む	良好	赤褐色	残存率約５％
44	陶器	碗	緻密	良好	黄褐色	残存率約５％
45	陶器	碗	緻密	良好	(外)黒色　(内)赤褐色	残存率約５％
46	陶器	小皿	緻密	良好	黒色	残存率約15％
47	陶器	灯明皿	緻密	良好	茶色	残存率約25％
48	石器	砥石	－	－	黄白色	ほぼ完形
49	土製品	泥面子	緻密	良好	(表)褐色　(裏)黒色	残存率約80％
50	鉄製品	刀子	－	－	－	ほぼ完形
51	貨幣	菊10銭	－	－	白銀色	アルミ貨

第3章　ま　と　め

土器について（第20図）

上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点（１）で検出された住居跡は、弥生時代後期に位置づけられる（註１）。ここでは周辺遺跡からの出土資料と比較し、その位置づけを考えてみたい。

本遺跡において検出された住居跡のうち、最も多くの遺物が検出されたのは３号住居跡である。３号住居跡の土器組成を見ると、壺・無頸壺・甕・高坏である。印旛沼周辺地域では南岸地域において輪積甕に付加条縄文を施文する臼井南式土器が、他地域においても霞ケ浦や鬼怒川流域の影響を受けた土器群が存在することがわかっているが、後期後葉から次第に付加条縄文を施文する東関東地方の特徴を残す土器群から、付加条縄文を施文しない南関東地方の土器群の影響が強まることが理解されている。３号住居跡において主体を占める土器群はいわゆる南関東系土器であり、胴部に縄文施文を行う土器は図化可能資料では僅か２点であり、しかも、１点は付加条縄文を施文するのではなく単節縄文を施文するといった特徴がわかる。まず、この土器様相を把握するためには、このような状況が周辺地域と比較したうえで、時間差であるのか、地域差であるのかを把握しなければならない。第10図１の甕をみると、頸部・胴部界以外に輪積痕を持たず、整形方法はハケ調整を基本とする特徴をもつ。弥生時代後期の印旛沼周辺においてこのような土器は組成の上で主体を成さないのは周知の通りであり、やはり系譜を東京湾岸地域に求める必要があろう。中期から後期に至る過程で甕の整形技法はハケからナデ主体に変化していく過程が明らかである。そして後期の後葉になるとハケ甕が主体を占めるようになる。東京湾地域の編年と照らし合わせるならば、後期後葉～終末に位置づけられる。浅鉢をみると複合口縁上に網目状撚糸文を施文し下端にヘラ状工具による刺突をもつ。網目状撚糸文は後期でも比較的新しい段階の指標であり、少なくとも後期前葉に位置づけることは困難であり、後期後葉以降になろう。また、沈線区画内にＳ字状結節文を施文する壺も後期でも終末段階になって登場する文様構成である。さらに、無文の算盤玉状の器形を呈する無頸壺の存在も後期後葉以降の特徴としてあげられる。以上のことから３号住居跡の出土資料は弥生時代後期後葉に位置づけることが理解できる。

他の住居跡は、破片資料のみであり、明確な時期を言及することが困難であるが、僅かな破片資料を見る限りは、３号住居跡とは時期差が無いものと思われる。つまり、上ノ山遺跡では、南関東系土器の組成割合の増加にともなって付加条縄文施文のいわゆる在地系土器の割合が著しく低下し、また付加条縄文ではなく単節縄文を施文するものが出現するなど、在地的な土器の製作技術が変化する一方で、新たな土器製作技法が定着する。このような変化が人の流れによるものか技術の伝播に伴うものかは、土器の胎土分析を含めた、精緻な観察が必要となるであろう。

さて周辺の遺跡を見てみると弥生時代後期後葉に位置づけられる遺跡として萱田遺跡群（註２）があげられる。報告者の藤岡孝司氏によって土器の編年研究と共に集落研究が行われており、八千代市内でも随一の弥生時代の遺跡群である（藤岡1986）。ここでもやはり、後期後葉段階になると付加条縄文を施文する土器群の割合が著しく低下し、いわゆる南関東系の土器群が主体となる事が理解されている。氏は付加条縄文を施文する在地の土器群と南関東系土器群の共伴関係から①在地土器主体期、②南関東の影響が強まる段階、③南関東系土器が主体を占める段階の３段階編年案を提示しており、おおよそ流れは肯定できよう。つまり、上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点は③の段階に位置づけることが可能であり、この段階においては上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点だけではなく、八千代市内の遺跡群において付加条縄文を施文する従来の土器から、南関東地方の影響を受けた土器群への変化が現れていることが理解できる。このような状況の中において５号住居跡の６（第14図）の様に頸部無文帯が著しく狭い上稲吉式の特徴をもつ土

第20図　八千代市新川流域の弥生時代遺跡分布図（1：50,000）

器が出土していることは、南関東地域の一方向からの影響の他に、引き続き東関東地域との交流が少なからずあった証拠といえる。

以上のように、上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点の状況は当地域の土器文化の変換期にあたることが理解できよう。

集落について（第20図）

八千代市内において発掘調査等で確認されている弥生時代の遺跡は49遺跡に及ぶ。時期としては、いわゆる中期須和田段階１遺跡、宮ノ台期３遺跡、その他の遺跡は後期に位置づけられる。須和田段階の遺跡は１遺跡であり、しかも、遺構を伴わないことから、その内容は不明といわざるを得ない（註３）。住居跡を伴う集落の出現を見るのは宮ノ台段階からである。当市内では小型環濠集落として著名な田原窪遺跡（８）をはじめとして、旧印旛沼に程近い北部地域に集中する傾向がある。集落の密集度はあまりなく、この点に関しては印旛沼南部地域と共通する現象であろう。八千代市の中央～南部の地域においては、宮ノ台期の集落検出の例は皆無であり、後期の集落分布と明確な違いが見て取れる。後期は研究者により３～４段階の変遷が想定されているが、ここでは便宜的に後期前葉（大崎台式併行期）、後期中葉（臼井南式併行期）、後期後葉（南関東系主体期）の３段階に分類する。八千代市内を中心とした新川流域では先に記した通り、後期の遺跡は非常に多く確認されているものの、出土した遺物量が少ないため、明確な段階を特定するのが困難である。

中期末～後期前葉と位置づけが可能なのは萱田遺跡群のみである。比較的印旛沼に近い市北部地域において環濠集落が形成されていたものが中期終末～後期前葉段階に至ると遺跡数が大幅に減少する。これに関しては、宮ノ台文化から東関東系の文化への移行に関わる問題とも考えられ、この段階における住居跡の検出例の減少は、集落形態の相違、つまり住居跡を構築しない集団への転換を意味する可能性もあり、即座に人口の減少を意味するものではないと言えよう。この段階は印旛沼周辺地域においても同様の現象が見られ、分布調査による資料蓄積や、通常の調査による一括出土遺物の、より詳細な吟味も必要になろう。

後期中葉になると遺跡数が前段階に比較し格段に増加に転じる一方、遺跡立地にも、樹枝状に台地に入り込む谷津の最奥部まで集落が展開する。八千代市においても、宮ノ台期において市内北部にのみ集落が展開していたが、この段階になると村上遺跡群（註４）・萱田遺跡群といった、市中南部地域にも展開するようになる。このような現象はどのように捉えたら良いであろうか。集落数の増加の背景を考える場合、①拠点となる集落の収容人員をこえる人口の増加に伴う新規の開拓と、②技術的発達を要因とした開拓耕地の拡大の２者を念頭に置く必要がある。しかし①の場合を考えると、印旛沼周辺地域には他の集落を凌駕するほどの規模と密集度をもつような集落は存在しないため、拠点からの分村といった構図は非常に考えづらい。つまり、絶対的な中心集団（勢力）の存在は現状からは説明するのが非常に困難であるといえる。このような絶対的中心集団の不在は、当地域において複雑な土器様相を生んだ背景の一つと考えることがいえる。やはり、今までの研究で指摘されている通り、谷津田及び台地上の畑地の開拓を要因とする集団の展開と考えるべきである。

後期後葉になると、集落数は更に増加傾向になる。前述した通り、この段階は宮ノ台期から後期の変化同様、土器に大きな変化が見られる段階であるが、中期から後期前葉段階には集落数の激減が見られたのに対して、後期後葉には全く反対の状況が理解される。すなわち、遺跡数増加が顕著になるということである。藤岡氏による権現後・ヲサル山遺跡の分析においては古墳時代前期と同様の場所に集落が形成され、古墳時代前期への連続性も指摘されている。更に、集落の規模も大きくなっている。この時

期に上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点の集落は形成されたのであるが、３軒という小規模な集落のうえ、古墳時代への連続性も持たないといった特徴は、萱田遺跡群とは異なるものであるが、谷津を挟んで隣接する川崎山遺跡（11）において弥生時代後期から古墳時代前期に至る集落が検出されていることを考慮に入れると、萱田遺跡群と大枠で同一視することが可能である。上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点が一時期で廃棄された理由としては、非常に小規模な谷津のため、水田経営に不向きで集落規模の拡大に適さなかった可能性もある一方、前述のように当該期の集落が検出されている隣接する川崎山遺跡の集落との関係からも考察していくことも必要となろう。

このように、上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点は八千代市内及び印旛沼周辺地域において、土器及び集落構造の大きな変換期において営まれた集落である。南関東系土器が主体を占める様相は、この段階における特徴といえるが、印旛沼周辺地域においても新川流域では早くから南関東系土器が主体を占めるようになる傾向があり、今後の資料の蓄積とともに他地域と比較検討を行いながら、その伝播経路を解明していく必要がある。集落に関しても、先にも記した通り、現在調査・整理中の川崎山遺跡との比較検討をはじめ、新川流域の他遺跡との関連を検討していく必要があろう。

（註１）先行して昭和61年度に調査が行われたａ地点においては、ｂ・ｃ地点と同様、後期に位置づけられる土器が出土しているものの、頚部に横走する櫛描波状文を密に施文するｂ・ｃ地点のものとは様相が異なる土器が出土している。頚部における櫛描文の充填度から考えると、恐らく、後期前葉段階に位置づけられる資料で、非常に茨城県南部地域の影響が強い土器である。以上の特徴から考えるとａ地点はｂ・ｃ地点との連続性は非常に薄いものと考えられる。なお、詳細ついてはａ地点の報告書に譲るが、ａ地点の報告書作成段階において、本書とは違う見解が提示される可能性もある。
（註２）権現後遺跡(2)・ヲサル山遺跡(3)・北海道遺跡(4)・井戸向遺跡(5)・白幡前遺跡(6)を指す。
（註３）沖塚遺跡(7)。平成５年度に八千代市遺跡調査会が調査を実施。
（註４）名主山遺跡(9)・込ノ内遺跡(10)を指す。

参考文献

江原台第1遺跡発掘調査団　1979　『江原台』
八千代市教育委員会　1983　『八千代の遺跡　―千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書―』
八千代市遺跡調査会　1984　『千葉県八千代市阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』
財団法人千葉県文化財センター　1985　『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)　―東葛飾・印旛地区―』
小高春雄　1986　「『北関東系土器』の様相と性格」『千葉県文化財センター研究紀要』10　財団法人千葉県文化財センター
藤岡孝司　1986　「印旛沼南部地域における後期弥生集落の一形態　―八千代市権現後・ヲサル山遺跡の分析―」『千葉県文化財センター研究紀要』10　財団法人千葉県文化財センター
千葉県立房総風土記の丘　1989　「シンポジウム房総の弥生文化　―後期北関東系土器の分布と変遷―〈記録集〉」『千葉県立房総風土記の丘年報』10
八千代市史編さん委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』　八千代市
小高春雄　1995　「千葉県における弥生時代後期の地域性について」『千葉県文化財センター研究紀要』15　財団法人千葉県文化財センター
八千代市教育委員会　1995　『平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
八千代市教育委員会　1996　『八千代市埋蔵文化財調査年報　―平成６年度版―』
八千代市教育委員会　1996　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告　平成７年度』
八千代市教育委員会　1997　『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成８年度』
比田井克仁　1997　「定型化古墳出現前における濃尾・畿内と関東の確執」『考古学研究』44―２
深谷昇　1997　「臼井南式土器について」『弥生土器シンポジウム―南関東の弥生土器―』
高花宏行　1999　「印旛沼周辺地域における弥生時代後期の土器の変遷について」『奈和』37
深谷昇　2000　「八千代市最古の弥生土器」『埋やちよ』№7　八千代市教育委員会

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちばけんやちよしうえのやまいせきｂ・ｃちてんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	千葉県八千代市上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	武藤健一、深谷　昇
編集機関	八千代市上ノ山遺跡調査会、八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 （八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課内） TEL 047(483)1151
発行年	西暦2000年（平成12年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上ノ山遺跡ｂ地点（うえのやまいせきｂちてん）	八千代市萱田町字上ノ山883-1、894-2の一部（やちよしかやだまちあざうえのやま）	12221	243	35度42分48秒	140度6分28秒	1994.2.1～1994.3.11	1,200m²	共同住宅建設
上ノ山遺跡ｃ地点（うえのやまいせきｃちてん）	八千代市萱田町字上ノ山883-2（やちよしかやだまちあざうえのやま）	12221	243	35度42分52秒	140度6分33秒	1997.1.10～1997.1.22	216m²	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ノ山遺跡ｂ地点	包蔵地	旧石器時代	遺物出土地点１カ所	剥片	
	集落跡	弥生時代後期	住居跡２軒	弥生土器	
	包蔵地	近世以降	溝２条	陶器	
上ノ山遺跡ｃ地点	集落跡	弥生時代後期	住居跡１軒	弥生土器	

写　真　図　版

図版 1

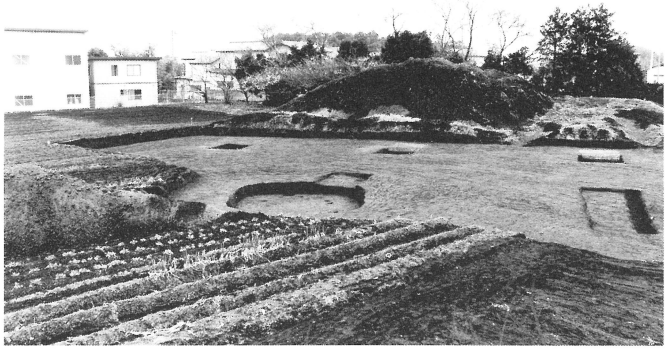
(1) 上ノ山遺跡周辺航空写真（昭和22年）

図版２

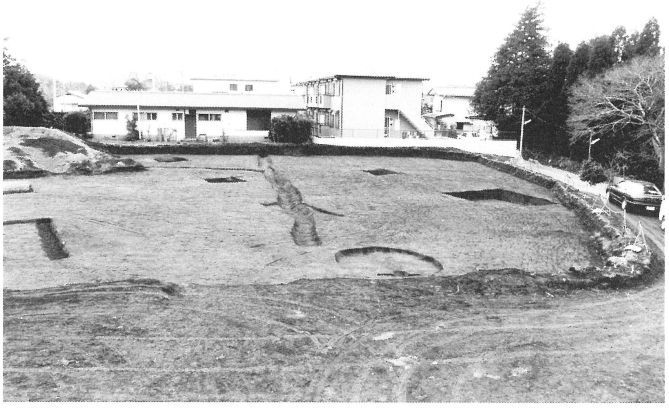
（1）上ノ山遺跡周辺航空写真（平成11年）

（2）ｂ・ｃ地点調査前全景（東より）

（3）ｃ地点調査区全景（北西より）

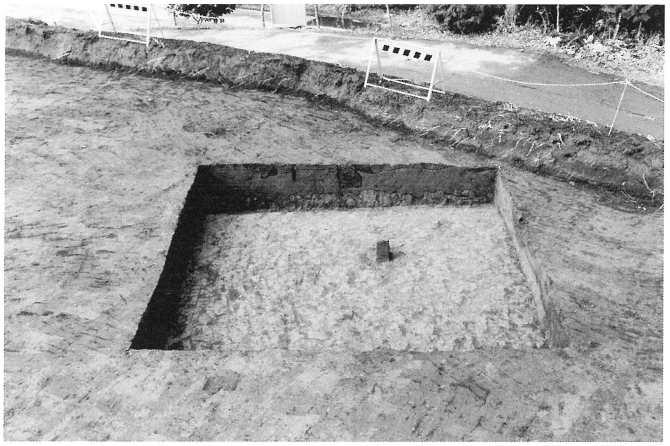


（4）ｂ地点調査区東全景（北より）



（5）ｂ地点調査区西全景（北より）

(1) G－3－1トレンチ土層断面

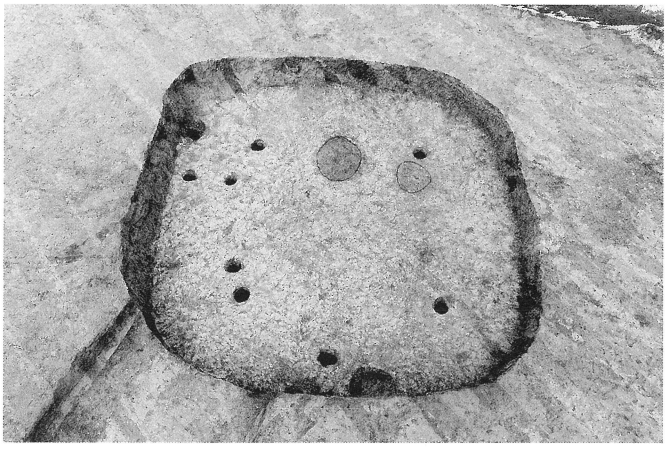


(2) G－2－1トレンチ遺物出土状況

(3) 3号住居跡遺物出土状況（確認調査）

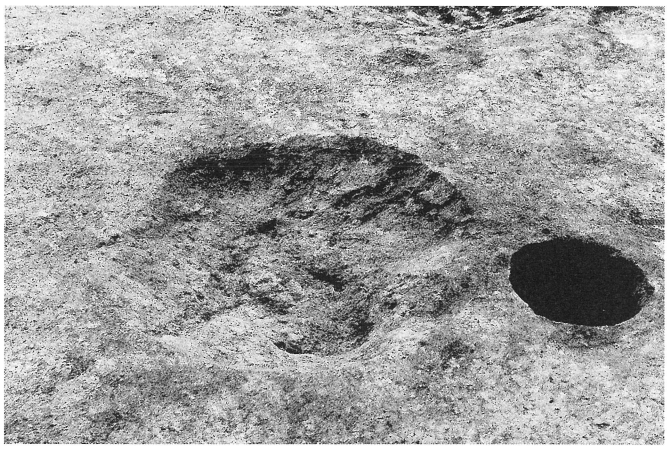
(4) 3号住居跡遺物出土状況（確認調査）

(5) 3号住居跡遺物出土状況



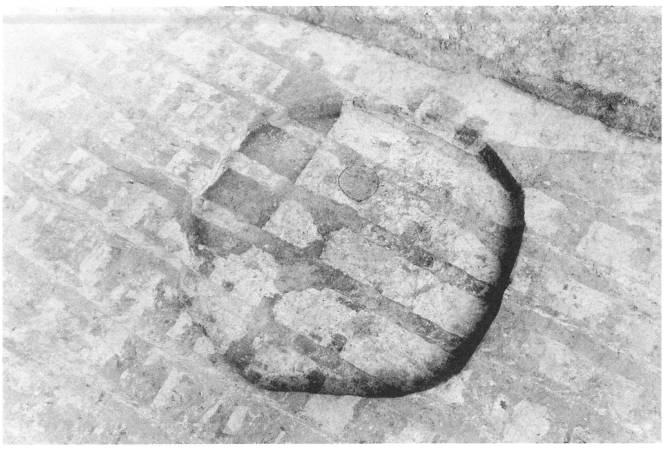
(6) 3号住居跡完掘状況

(7) 3号住居跡A炉完掘状況

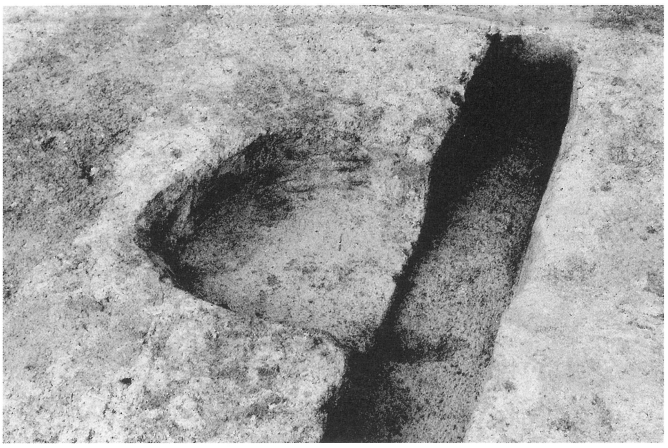


(8) 3号住居跡B炉完掘状況

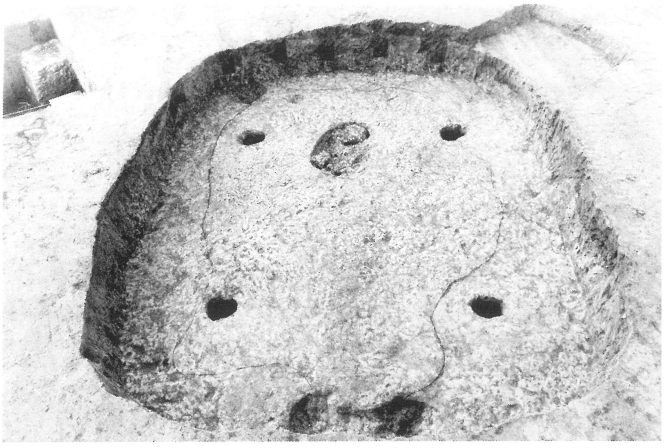
図版 4



(1) 4 号住居跡完掘状況

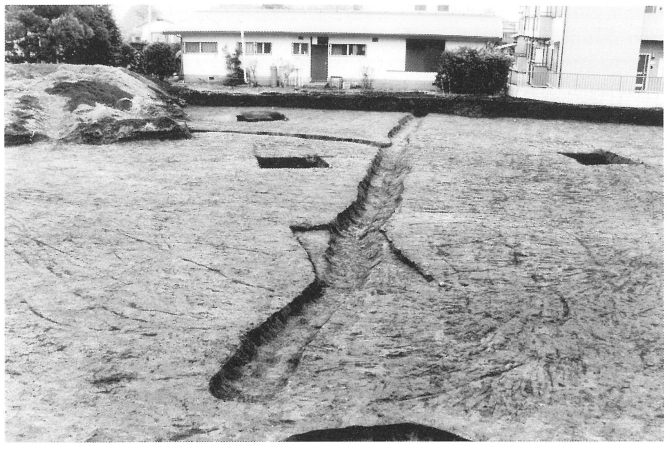


(2) 4 号住居跡炉完掘状況



(3) 5 号住居跡完掘状況

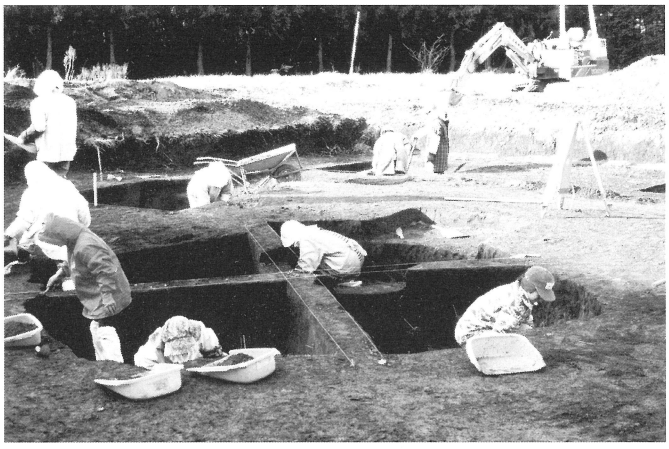
(4) 5 号住居跡炉完掘状況



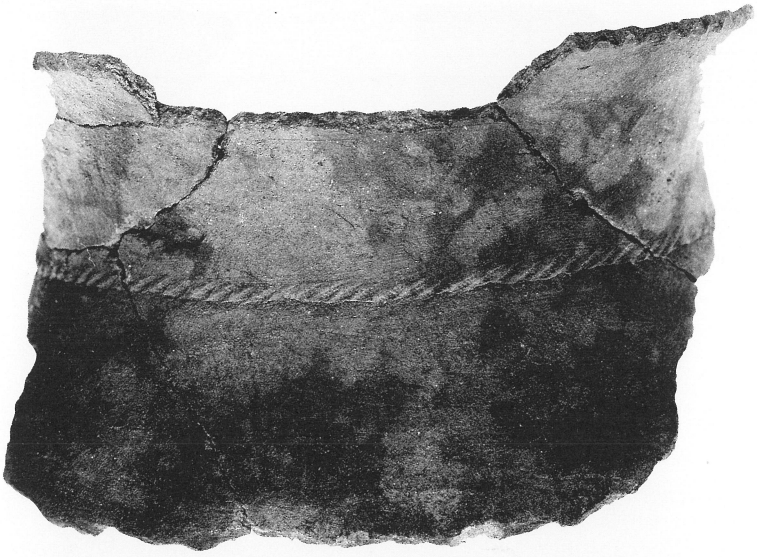
(5) 1 号溝完掘状況

(6) 2 号溝完掘状況

(7) 調査風景



(8) 調査風景



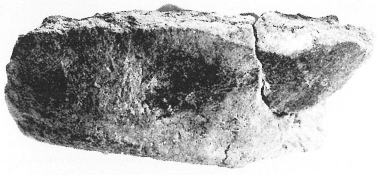
1

2

3

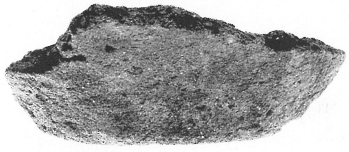
4

5



6

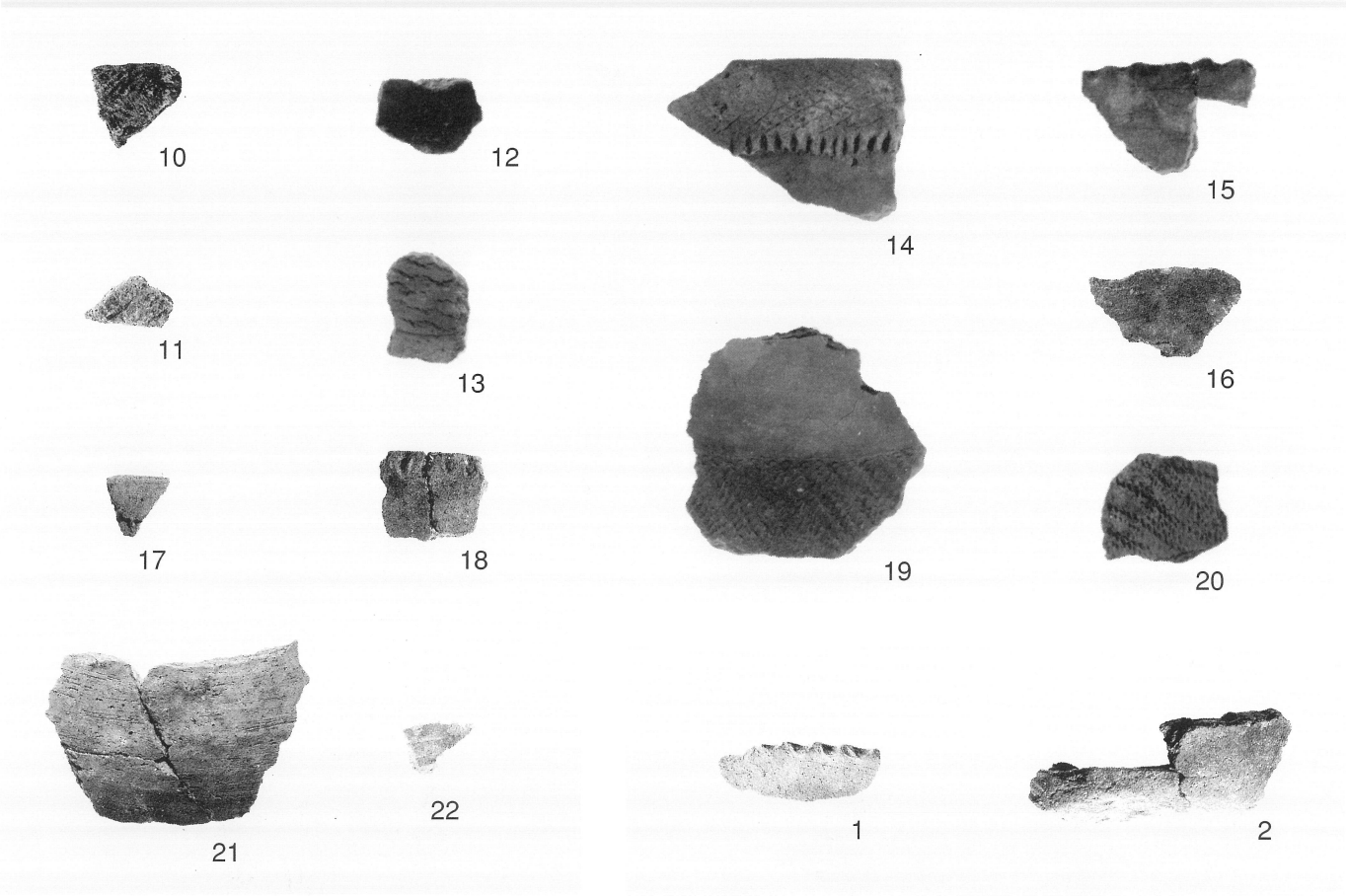
7



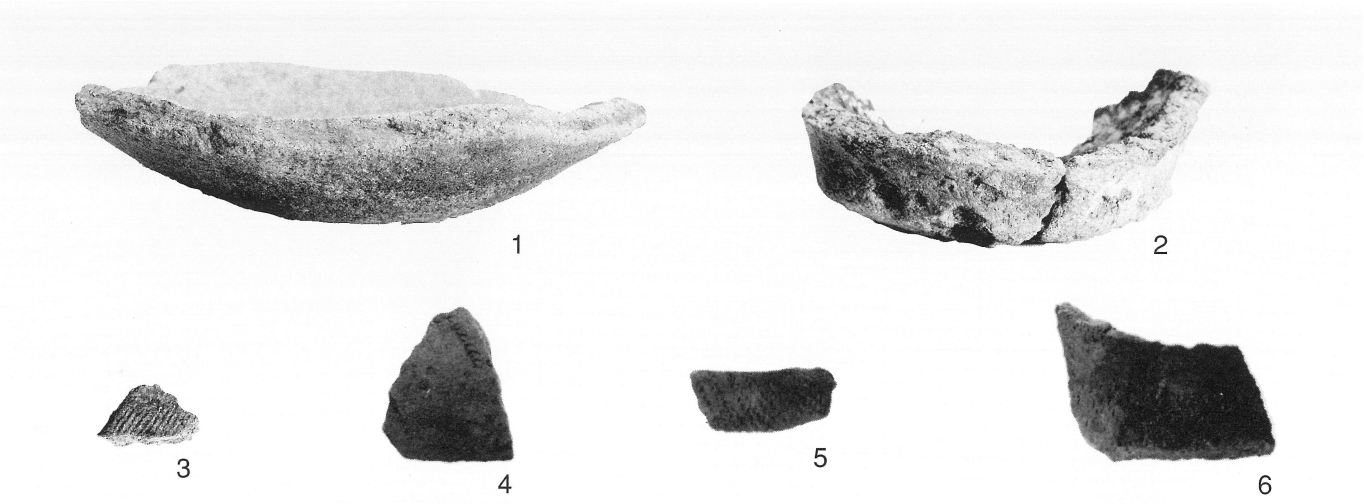
8

9

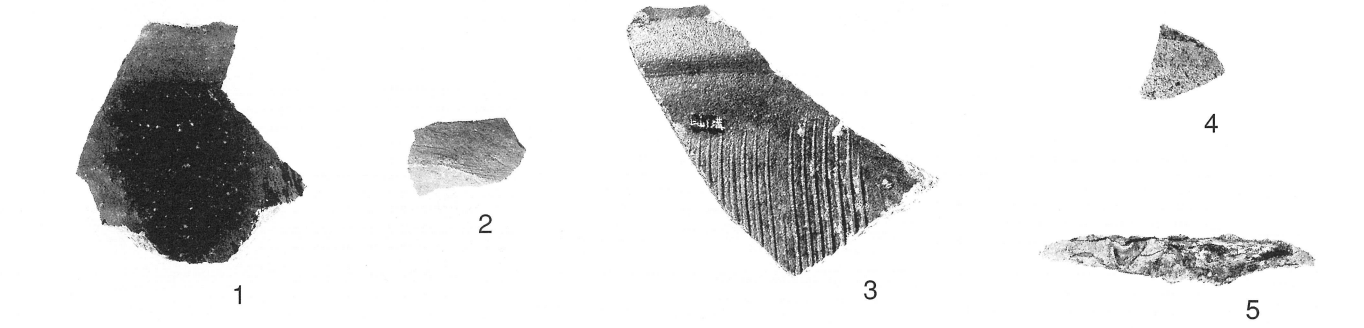
（1） 3 号住居跡出土遺物



(1) 3 号住居跡出土遺物　　(2) 4 号住居跡出土遺物

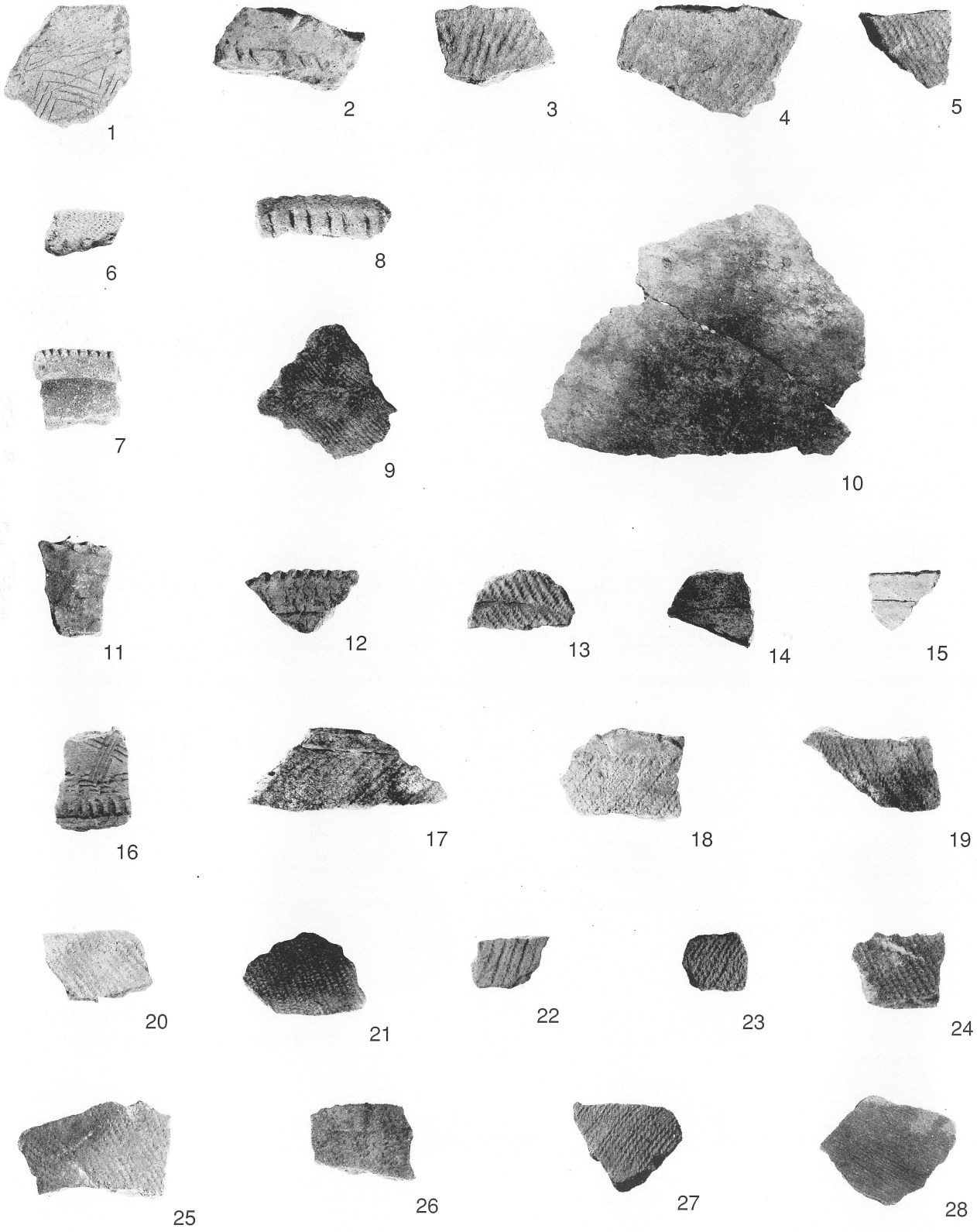


(3) 5 号住居跡出土遺物

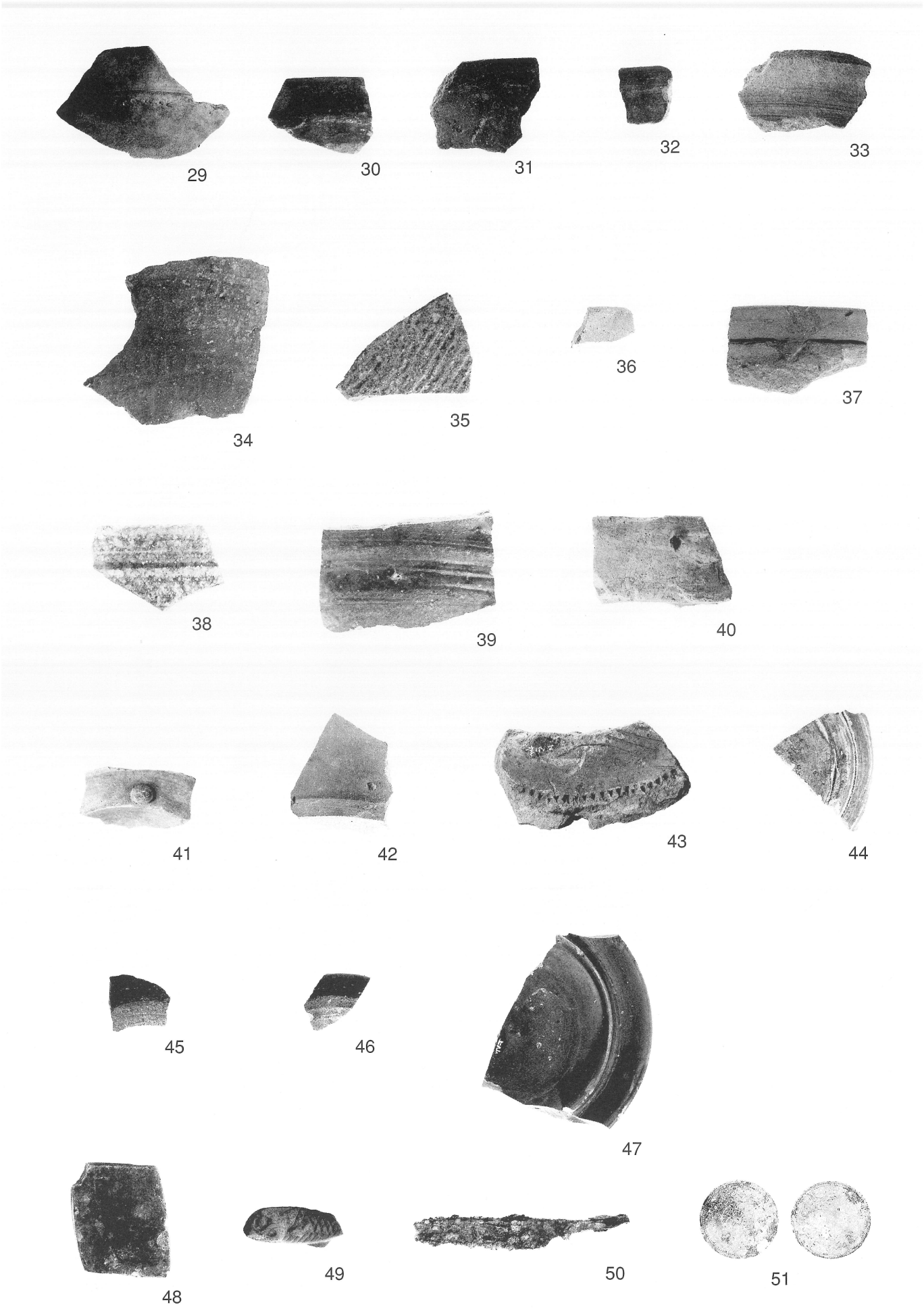


(4) 1 号溝出土遺物

（1）2 号溝出土遺物



（2）遺構外出土遺物



（1）遺構外出土遺物

千葉県八千代市
上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点発掘調査報告書

2000年３月24日印刷
2000年３月31日発行

編　集　　八千代市上ノ山遺跡調査会
　　八千代市遺跡調査会
　　千葉県八千代市大和田138-2
　　（八千代市教育委員会生涯学習部生涯学習課内）

発　行　　中台　道子
　　中台　　昭
　　千葉県八千代市萱田町1019

印　刷　　株式会社　山下印刷
　　千葉県船橋市夏見台3-21-5

千葉県八千代市上ノ山遺跡ｂ・ｃ地点発掘調査報告書　正誤表

訂正箇所		誤	正
調査会組織	平成８年度　８行目	事務局長	事務局員
調査会組織	平成11年度 12行目	事務局長	事務局員
図版６	（１）３号住居跡出土遺物	17と18の遺物写真が逆のため入れ替える	